緋弾のエリア ~ 情報科-インフォルマ-の戦弟-アミコ- ~

緋村 梢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜情報科・インフォーマーの戦弟・アミコ〜

【Nコード】

N3730W

【作者名】

緋村 梢

【あらすじ】

この物語は緋弾のアリア〜謎の情報科・インフォーマーの主人公く鷺宮 茜の戦弟である、涛瀬 諒の目線で見えるお話です。（アミコ）
緋弾のアリアでいうAAみたいなものです。）

東京武偵高校に通う一人の少年…涛瀬 諒（アサルト）は強襲科一年として入学した。

親に反対され、中学校は一般中学に仕方なくいつていたが、中学3年の時、両親を事故で亡くしてしまった…。

そして、悲しみの中、行われた両親の葬儀に両親の反対を押し切っ

て部偵高に入学した姉… 湊瀬 真紀まき（17）が喪服姿でショートカ
ットの少女を引き連れて帰ってきた…

決意（前書き）

キャラ崩壊有

決意

この物語は緋弾のアリア〜謎の情報科・インフォーマ〜の主人公
<鷺宮 茜>の戦弟である、

湊瀬 諒の目線で見えるお話です。（緋弾のアリアというAAみたいな
なものです。）

東京武偵高校に通う一人の少年…湊瀬 諒（16）は強襲科一年と
して入学した。

親に反対され、中学校は一般中学に仕方なくいつていたが、中学3
年の時、両親を事故で亡くしてしまった…。

そして、悲しみの中、行われた両親の葬儀に両親の反対を押し切つ
て武偵高に入学した姉…湊瀬 真紀（17）が喪服姿でショートカ
ットの少女を引き連れて帰ってきた。

それが鷺宮 茜であった。

真紀は迷うこともせず、諒のところに茜を連れ、やってきた。

諒 「お帰り、姉さん」

真紀「ただいま。茜、貴女は記帳して待ってなさい」

茜 「わかりました」

茜は、真紀に一礼して、記帳に向かった。

諒 「さっきの人は誰？」

真紀「あの子は戦妹アミカの鷺宮 茜よ。今、私が面倒みてるのよ」

諒 「そうなんだ」

真紀は昔から面倒見がよく、周りからも慕われていた。

バンチユー
一般中学から武偵高に入学し、今ではSランク武偵でとっている。

真紀「で、諒、アンタは武偵高に来るの？」

諒 「でも…」

真紀「アンタはもう一人の大人よ。これからは自分の意志で行動しなさい」

諒 「…わかった。僕は…武偵になる」

真紀「フフツ、なら、待ってるわ…」

そして…二ヶ月後に武偵殺しのカージャックにより行方不明になった。

諒は遺品であったベレッタP×4“ストーム”とバタフライナイフを持ち、インターンとして武偵高に入学した…

強襲科（アサルト）

諒はまず初めに、真紀の戦姉妹^{アミカ}を組んでいた鷺宮 茜に戦弟^{アミコ}を申請することにした。

だが…茜の申請人数は70名。

諒はその中の最後であった。

やはり茜はSランクでCVRからお呼びがかかるほどの美しさらしい。

人気があるのも肯ける。

諒 「はぁ……。なんとか間に合った…」

ライカ「おっす、諒オー」

このテンションの高い少女…火野 ライカは初対面早々、諒に喧嘩を吹っ掛けてきた上に、共に説教を食らった苦い出会い方をした親友^{バル}である。

あかり「おはよう、諒君」

そしてこの子が、天然少女…間宮 あかり。

初めて会った時、諒は脅えられていた。

本当のところ、諒の方がUZIを持った彼女に諒は退いた。

志乃 「おはようございます、諒さん」

この子は、容姿端麗才色兼備の佐々木 志乃。

初め会った時は、諒の事を涛瀬さんと呼んでいたのだが、諒があかりと仲良くなった途端、諒さんと呼ぶようになった。＜明らかに格下げである＞

諒 「おはようございます」

ライカ「何書いてんの？」

ライカは諒の書いてあった申請書を手に取った。

ライカ「うゝあ……」

諒 「何ですかその反応は!？」

あかり「なにになに？」

あかりも申請書を横から覗く。

あかり「鷺宮先輩に目をつけるなんて……」

ライカ「やっぱり諒も男だよな……」

諒 「うゝ、誤解ですよ!!私ほただ……」

志乃 「ただ？」

なぜか、志乃が聞き返す。

言いかけた瞬間、姉の事が頭に浮かび、言葉に詰まった。

諒 「もう…なんとも言っってください…」

諒は投げアリになり、外を眺める。

ライカ「じよ、冗談だつて！んな顔すんな！」

すると、ものすごい怒りの表情で綴が入ってきた。

綴 「涛瀬！！さつさと申請書を出さんか！！」

諒 「わかりましたよ」

諒はライカから紙をとり、綴に渡した。

綴は申請書を流し読みをした。

綴 「本当にいいんだな？」

諒 「はい。姉の選んだ人なら間違いはないでしょう…」

綴 「…わかった。だが、言っておく、鷺宮への申請人数はお前を入れて70人…。昨日までに20人が挑戦し、敗北している。今は変更する者も出てきて、鷺宮への申請数は減ってきている」

あかり「20人も落ちたんですか!？」

あかり、ライカ、志乃は驚いた。

綴 「とうわけだからがんばれよ、涛瀬」

諒 「ありがとうございます」

綴は教務科マスタースに帰って行った。

ライカ「諒、さっきの人と知り合いか？」

諒 「ええ。まあそんなところです」

そして、一般教科ノルマーレが始まった。

一般教科ノルマーレとは…高校生が必ず受けなければならない教科をするのである。

午後になり、諒は強襲科アサルトの実習に参加した。

シューティングシューティング射的シューティングをしていた。

ストームを両手で握り、ターゲットボードを撃つ。

やはり、一般中学パンチューからでは銃に慣れるのに時間がかかった。

しかし、なんとか目標ターゲットの肩にあるポイントエリアにはいつている。

横では、あかりが蘭豹に怒られているし、反対の横にはアリアがいる。

まるで上中下アップダウンである。

すると、アリアが諒の的を見て感心している。

そして…アリアは諒に近づく。

アリア「アンタやるわね。感心したわ」

諒 「お褒めいただきありがとうございます」

アリア「だけど、もう少しこう…」

アリアは諒の手を小さな手で覆い、構え方を教える。

諒 「こう…ですか？」

アリア「そうよ。それで撃ってみなさい」

諒 「分かりました」

諒はアリアから教わった持ち方で構え、撃つ。

その弾は、初弾が貫いた穴を後弾がすべて通った。

アリア「凄じじゃない！ たったあれだけしか教えていないのに」ワン平
貫通ルシヨットができるなんて…」

諒 「まぐれですよ」

アリア「もしかしたらあなたには才能があるかもしれないわ。戦徒^{アミカ}は居るの?」

諒「いませんよ。今、申請していて試験待ちです」

アリア「誰に申請したの?」

諒「鷲宮先輩です」

アリア「茜に?なら頑張りなさい。茜は私よりあなたの事を強くしてくれるわ」

諒「神崎先輩より強いんですか?」

アリア「認めたくないけどね」

蘭豹「おい、涛瀬!」

諒「はい!それではまたいつか…」

諒はアリアに一礼して、蘭豹のところに向かう。

諒「なんですか?」

蘭豹「こいつに稽古つける」

諒「はい?」

蘭豹「こいつにUZIの正しい使い方を教えてやれと言ってらんや」

諒 「わかりました」

諒はサブマガジンとUZIをあかりから受け取り、片手で構えた。

そしてUZIを撃った。

弾はすべて円中心の辺りに中った。

あかり「すごい…」

蘭豹 「見たか間宮、これがAランクの実力や。覚えとけ」

あかり「はい…」

すると、諒の携帯が鳴る。

諒は携帯を取り出し、メールを見る。

コネクト 通信科からのメールであった。

《インフォルマ情報科二年 鷺宮 茜より電通ありアサルト「強襲科一年 涛瀬 諒へ…
本日試験を行う。場所は…アサルト強襲科実習場前にて、タッチング接触試験を行う。
時間は午後4時50分just。尚、一秒でも遅れたら失格とみな
す。必須装備はなし。手ぶらだろうとアンチマテリアルを使おうと
許可する」》

諒 「ついに…来た…」

あかり「頑張つてね!」

諒 「うん！ありがとう」

そして…約束の時間となった…

決選（アンサーチョイス）

諒は指定された強襲科実習場前アサルトで待っていた。

「はあ……。なんだか緊張するなあ〜」

時計は午後4時47分を指している。

この時間帯は生徒は帰ってしまっている。

今回、諒が面と向かって会うのは初めてであった。

そして、時計の針が午後4時50分を指した。

一人の少女がやってきた。

セミロングヘアで黒に近い紅髪、身長は諒より高く、ダークブルーの瞳色をしている。

噂通りの美少女であった。

「あなたが涛瀬 諒君？」

「は、はい!」

諒は少々緊張していた。

「そう、なら試験方法は知ってる？」

あれ？さっきメールに書いたの忘れたのかな？

諒はそう思った。

しかし…すぐに分かった。

すでに試験は始まっていた。

さっきのはちゃんとメールを確認したかのテスト…つまり、情報理解力の試験。

さすがSランク武偵だ。

「はい、タッチング接触試験ですよね」

「ええ。私はね、女子の場合、スカートがめくれない程度にあしらってきたけど…、男子の場合は本気で行くから」

「分かりました！」

「それじゃ始め！」

諒はいきなり正面から狙った。

茜は右に避ける。

諒はもう一度正面から狙う。

茜は左に避ける。

「何度やっても同じよ…」

茜はまたかというような表情をする。

そして、諒はもう一度正面から狙う。

茜は右に避ける。

再び諒は正面から狙う。

茜は左に避ける。

「大体…このくらいでみんな諦めるのよね…」

茜はそう呟いた。

「やっぱりだ…。さっきから左右に規則的に避けている…。なら…
次は右に逃げるはず…」

諒はそう考え、もう一度、正面を狙ってみる。

茜は右に避けた。

諒は直ぐに攻めた。

そして、諒は茜の制服に触れた。

「コレで合格ですか？」

「…ええ。合格よ」

「やった！」

「やっぱり気付いたのね？」

「ええ。先輩って右左に規則的に逃げるんですよ？」

「そうよ。今までの子にも同じ方法でやってきたわ…。だけど誰一人気付く前に諦めてしまう…。
アナタを除いてね」

「でも…どうして接触試験タッチングなんですか？」

「接触試験タッチングなら簡単でしょ？その場で済ませられるし、体力も平等でできるからね…」

「なるほど…流石先輩ですね」

「茜でいいわよ…」

「いや…でも先輩は…」

「言うこと聞けないなら戦姉アミカを辞めるわよ」

「す、すみません！せんぱ…茜さん…」

「よし。それじゃよろしく」

「はい、よろしくお願ひします…！」

「それじゃあ、着いてきなさい」

「どこに行くんですか？」

「私の寮よ」

「ど、どうしてですか!？」

「折角なんだから、家で食事でもと思ってね。嫌ならいいけど…」

「い、嫌じゃないです!!--とっっても嬉しいです!!--」

「なら行きましょう」

茜はそういって、校門の反対側に歩き始めた。

「あ、あの…:出口はこっちに…」

「私の車があるのよ」

茜は言いながら鍵を見せる。

「自家用車持ちなんだ…」

そう思いながらも、茜の後をついていく。

そして、茜が停めてある車を見て、諒は驚いた。

アストンマーティン DB9 クーペ、06であった。

「あ、茜さん…。この車って…」

「私のよ。さあ乗って」

茜は運転席に乗り込み、シートベルトをした。

諒も驚きつつも、乗り込み、シートベルトをした。

そして、DB9は発進した。

アストンマーティン DB9 クーペ、06は¥20,000,000近くする高級車…

諒は興味こそなかったが、車好きの友達から聞いたことがあった。

「諒君は何が食べたい？」

「ま、諒でいいです」

「そう、なら諒、何が食べたい？」

「何でも構いません」

「なら、ビーフシチュー作ってあげる」

「本当ですか！？僕大好きなんですよ」

「そう、なら作り甲斐があるわ」

諒は小学生のころに、姉の真紀が作ってくれたビーフシチューが好

きであつた。

「…実は僕、茜さんが戦姉アミカを組んでいた涛瀬 真紀の弟なんです」

「そんなこと初めから知っていたわ…」

「そつなんですか!？」

「当たり前でしょ。私に申請してきた一年の事は全員調べてあるわ」

「すごいですね…」

「大したことじゃないわ」

そして寮に到着した。

東京武偵高校第一女子寮…

茜は車を借りた端の空き地に停めた。

車から降り、部屋の前に到着した。

「ちょっと待って!」

茜は突然、立ち止まる。

「どうかしたんですか?」

すると、茜はコルト キングゴブラを太もものホルスターから取り出した。

「ちょっとどうしたんですか!？」

「誰か…侵入してる…」

「誰かって?」

「いいから、アンタはそこにいなさい」

「ぼ、僕も手伝います!」

「なら、後ろは頼んだわよ」

「はい!」

あれ?うしろ?誰もいないのに?

諒は少し疑問に思ったが、ストームを構えながら、一応言われたとおり後ろを警戒した。

そして、茜は勢いよくドアを開けて中に入る。

諒はストームを構えたまま、後ろを警戒しながら部屋に入る。

すると、部屋の一室からピンクのツインテールの少女が飛び出して、ガバメント二丁構えて茜に放った。

茜は素早く、弾丸をキングコブラの弾丸で撃ちとめた。

そして、後方から諒のよく知っているUZI持ちが銃を構えて、

撃とうとしていたので、諒はUZIをストームで撃ち落とす。

「何の真似？アリア」

「アンタの実力をあかりに見せようと思って」

「すみません！鷺宮先輩！諒君！」

「別に私は構わないけど…諒が危ないでしょ」

「諒？」

丁度、茜の後ろにいるため、アリアからは見えていない。

「どうも…」

諒は横からひょいと顔を出す。

「アンタ、合格したのね。おめでとう」

「ありがとうございます」

「おめでとう、諒君」

「間宮さんこそおめでとうございます」

「うん、ありがとう。これでアリア先輩と…」

「あっ、そうだ。茜、お腹すいた。何か作って」

「しょうがないわね…ビーフシチューでいいでしょ？」

「ええ。構わないわ」

茜はキッチンに向かい、料理を始めた・・・

特訓

しばらくして、茜特製ビーフシチューを皿に注ぎ、テーブルに3人分並べた。

「あれ？一人分足りないわよ」

「ああ、私は食べないから」

「どうしてですか？」

「軍事訓練の一つ…断食よ。国家第二軍の訓練…」

セカンドディフェンダー

「どうしてそんなことするのよ？」

「緊急時に食糧が少ない場合にチームのメンバーが全員餓死しないようにするためよ。」

私も間接的だけど、国家第二軍の訓練をしているの。というわけだから、私は書斎にいるから」

そう言って、茜は書斎に向かった。

「やっぱり読めないわ…茜…」

「そうなんですか？」

「私も茜とは知り合っただけだから、あまり詳しいことは知らないのよ」

「そんなことより、冷めないうちに食べませんか？」

「そうね、いただきますよ」

そして三人は、ビーフシチューを食べ始めた。

しばらくして食事を終えたエリアとあかりは帰って行った。

諒は皿を食器洗浄機に入れた。

すると、茜が書斎から出てきた。

「あら、片づけてくれたの？ありがとうございます」

「いえ、当然のことですよ」

「ちょっと来てもらえる？」

「ええ、いいですよ」

諒は、茜の後をついていく。

「この部屋が、あなたの部屋よ」

茜は奥から3番目の部屋を開けた。

その部屋は、畳20畳分はあるであろうというフローリングの部屋であった。

ベッドは備え付けで、防弾倉庫、クローゼット、銃保管庫まで完備

されている。

もちろん、TVも50インチの壁掛けLED REGZAである。

「すごい…。こんないい部屋を借りていいんですか!？」

「ええ。もちろんよ。ただし、私と戦徒アミカを組んだからには、どんな辛い特訓も受けること。いいわね？」

「はい!」

「よし。それなら明日、引っ越しなさい」

「分かりました!」

そして、一週間がたち、諒の厳しい特訓が始まった。

朝4時起床、4時20分3KMランニング、5時半朝食、6時ランニング登校…

もちろん、茜もランニング登校をしている。

そして学校の授業を受ける。

武偵殺しの爆弾事件ボムケースだとか、なんかがあったみたいだったが、諒はあまり意識していなかった。

「お…は…よ…つ…い…ま…す…」

諒は、全身筋肉痛になっていた。

「大丈夫か？」

「ええ…なんとか…」

「鷺宮先輩ってそんなに厳しいの？」

「違います。ただ…僕の体力が茜さんの足元にも及んでないんです…」

「でも…これ以上続けると体が…」

志乃の眼は、ものすごく心配そうにしていた。

「大丈夫ですよ。それより、アミカグループの身体測定に行かれた方が…」

「うわぁ！やべエ！んじゃ後でな」

ライカ、あかり、志乃は身体測定に向かった。

「ふう〜。徐々に慣れてきたからいいけど…茜さんはすごいや。一
緒のペースなのに
息切れ一つ起こさないしな…。それより…少し寝よう…。」

諒は少しながらも眠りに就いた。

しばらく寝入っていると、頭をゴンツと叩かれた。

「う…」

「なにねてんだよ…」

「どちらさまで？」

「忘れたのかよ！？萌咲だ！」

「ああ、萌君？」

「萌君言うな！！それよりほら、先生が呼んでる」

萌咲が目を向けた先には綴がやばいものを吸いながらこつちを睨んでいる。

諒は立ち上がり、綴のところに向かう。

「何か用ですか？」

「最近、鷺宮の特訓を受けているようだが…大丈夫か？」

「ええ。大丈夫ですよ。でも、どうしたんですか？」

「鷺宮の特訓は厳しいと蘭豹から聞いて居てな、一応確認をと思っただが…うれしそうだな」

「ええ。なんだか茜さんがいるだけで、楽しいんですよ」

「そうか。だから後輩からも先輩からも慕われているわけだ…。まあとにかく頑張れ」

「はい！」

そして綴はマスターズ教務科に戻って行った。

息抜

翌日、諒は休み時間に茜の教室に行き、放課後格闘練習をすることを告げられた。

「はあく…がんばろう。明日は休みだし、アキバに行って本を買ってこよう…」

すると、とある教室の前にライカとあかりが立っていた。

「火野さ…」

諒が呼ぼうとしたが、ライカとあかりはトイレに入ってしまった。

ライカはまるで泣きそうな顔をしていた。

「どうしたんだろ？」

諒はライカとあかりが覗いていた教室を覗く。

中では、馬鹿な男子共がかわいさランキングとやらをノートに書いていた。

でも、ライカの名前にはバツで消されていた。

「馬鹿な男子共だな…。お前らの目は節穴と僕は見ました」

諒はそう呟き、自分の教室に戻った。

そして放課後になり、諒と茜は強襲科訓練場アサルト 闘技場コロシアムで
格闘練習をして帰った。

翌日、諒は電車で秋葉原の書店に来ていた。

まず、諒はとあるシリーズとバカテス、ハヤテを数巻買い、次の目的地に行こうとした時、
目の前をライカが変装のつもりだろうか、帽子を深くかぶり、眼鏡をかけていた。

確かに、ライカにとってアキバにいることを知られたら恥ずかしいのだろう。

諒は、ライカの後について行き、肩をたたく。

「うあっ!!」

ライカはものすごく驚いた。

「奇遇ですね、火野さん」

「な、なんでお前がここなんだよ!？」

「僕も買い物ですよ。もしよかったら、一緒にしませんか？」

「なんでお前となんか…」

「もし、武偵高の生徒があなたに気づいても僕が誤魔化してあげますから…」

諒はライカの耳元で囁いた。

「わ、わかった…」

なぜかライカは赤くなる。

「さて、どこ行くんです？」

「こっち…」

ライカはとある店に入って行った。

諒もライカについていく。

「ま、諒は恥ずかしくないのか？」

「何がですか？」

「その…こんなところに来ること…」

「別に僕もここに来るつもりでしたし…」

「そうなのか？」

「僕も結構こつこつというのは嫌いじゃない方なんですよ。たまに読みますし…」

「マジかよ…」

「誤解しないでください。ただ、友達から一度本を借りたら続きが気になっただけですから」

「ふうん」

「まだ信じてませんね…」

「んな訳ないだろ。信じてるから安心しろ」

「なら、よかったです」

そして諒とライカは店内を見て回った。

しばらくして、店を出た諒とライカは、電車に乗り、帰宅するため駅に向かった。

「今日はありがとうな」

「別に僕は何もしていませんよ」

「でも付き合ってくれただろ」

「ああ、別にお気になさらずに…。僕は、火野さんの意外な一面が見れて楽しかったですよ」

「ななななんだよそれ!？」

気づけば、周りに人がいない公園であった。

ライカは少し虚度った。

「さて、帰りましょうか」

「そ、そうだな」

諒とライカが歩き始めた瞬間、銃声が轟く。

「今の！」

「銃声ですね、行ってみましょう！」

諒とライカは銃声があった場所に向かうと、野次馬が溜まっていた。

「すみません！武偵です！」

諒は常備していた生徒手帳を見せながら、野次馬の間を通り抜ける。

野次馬の群れを抜けると、そこには、漆黒の制服から血を流した警学生がいた。

「大丈夫ですか!？」

「あ、ああ…。だけど…立てないな…」

諒は止血を始める。

「火野さん！ここを押さえておいてください！」

「わ、わかった！」

ライカは諒の代わりに止血をする。

諒は銃を構えたままの犯人を睨む。

犯人の使用武器は、H & a m p ; K V P 7 0。

口径は9 m m x 1 9 …。

そして、警学生の持った銃を見る。

ワルサー P 8 8 …口径は9 m m x 1 9。

「すみません、この銃貸していただけますか？」

「ああ…使ってくれ…」

警学生は銃を差し出す。

「ありがとうございます」

諒は警学生のワルサーを受け取る。

そして犯人に銃口を向けて構える。

「なんだお前、俺とやり合うつもりか？」

「忠告します。今すぐ銃を捨てて投降しなさい！」

「嫌だね」

犯人は諒に銃を向ける。

「後悔しないでくださいね。死んだとしても…」

諒は両手で構えていた銃を右片手水平持ちで構える。

「面白い！やれるもんならやってみる！」

犯人はVP70を撃った。

諒もワルサーを二発撃つ。

犯人が撃った弾は、諒が撃った弾で撃ちとめられた。

そして、もう一発の弾はVP70の銃口に吸い込まれるように入り、銃は暴発した。

すぐさま諒は、犯人の懐に入り、溝内を殴り、気絶させた。

犯人はそのあとすぐに来た警学生に手錠をかけられ、連行された。

諒は銃を警学生に返しに行く。

「これ、ありがとうございます」

「礼を言うのはこちらの方だ、ありがとう」

「早く元気になってくださいね」

「ああ、ありがとう」

警学生は救急車に乗せられ、病院に運ばれた。

諒とライカは警学校の事情聴取を受けて帰った・・・

cccc

翌日、諒は綴に昨日のことを話し、教室に向かった。

教室に入ると、ライカが元気にあかりと戯れていた。

「お、諒!どうだった?」

「一週間の強襲科実習場の薬莢処理だそうです…」

「なんで!?!」

「諒さんはただ、犯人逮捕に協力しただけですよね?」

「そつだ!文句いつてくる!」

ライカはそついうと、歩きだした。

「やめてくださいよ…」

「どうしてだ!?!」

「そつよ、あなた達」

「「鷺宮先輩!」」

あかりと志乃は驚く。

「茜先輩!どうしてですか!?!」

「武偵憲章4条…武偵は自立せよ。要請なき手出しは無用の事。つまり…武偵憲章を破ったことになるわ…」

「だからって…」

「だけどね…もし武偵が事件に出くわして、仮にそこに居た被害者が助けを求めるか、協力を求めてきたのなら…例外なんだけど…誰か知らない？」

「…私が証言します」

切り出したのは、ライカであった。

「火野さん！」

「いいんだよ、あの場に居たんだし…」

「そう。なら一緒に…」

すると、茜の携帯が鳴る。

「もしもし、倅雅？何なのいきなり…」

「火野さん、今なら逃げられます」

「いいって」

「わかったわ。ありがとう…」

茜はそういうと、電話を切った。

「昨日のことは一人の警学生が武偵高生に助けを求めたらしい…。
だけど、依頼人が病院に運ばれたせいで、伝達が遅れたみたいね」

「てことは…」

「無罪…ということになるわね。だからあなたの証言は必要ないわ。
それじゃあ、後の処理は私がしておくから安心しなさい」

「ありがとうございます」

「諒、今日の放課後は射的にいなさい」

「わかりました」

茜は微笑みながら、マスターズ 教務科に向かっていった。

「よかったね！諒君」

「う、うん…」

「よかったな、諒」

「火野さん…すみませんでした」

諒は火野に頭を下げた。

「な、なんで謝るんだよ!？」

「僕のせいで…昨日のことを…」

「別にいいんだよ。それに話さなくて済んだし…結果オーライだ。だから頭上げるよ」

「すみません…」

その後、諒の罪は晴れ、いつものように過ごしていた。

午後の授業である強襲科アサルトのCQCを諒は男女交互に相手していた。

ライカも男子相手に戦っている。

「おりゃ…!」

諒は攻撃を仕掛けられたため、撃ちこまれた右腕を流し、掴んで擦じった。

すると、相手はくるっと一回転し、地面にねじ伏せられた。

「ま、参った…」

諒はその言葉を聞くと、すぐに手を離した。

「次は誰ですか？」

しかし、誰も返事をしない…。

「終わりや」

蘭豹がそう言いながら歩いてくる。

「そうですか」

「いや、まだ私が居るぞ！」

相手は…ライカしかいなかった。

「え…」

「だから、火野しか居らんねん」

「なんだか絶望的です…」

「グダグダ言っでないで行くぞ…！」

ライカはいきなり諒に襲いかかる。

諒は寸前に避ける。

「オラぁ　　…！！」

ライカは右ストレートで殴りかかる。

そして諒は、右に避けて右手首を握り、ライカの背中に回った。

「こんのオ　　…！」

ライカは足で、諒の腹部を蹴った。

諒は少し飛ばされた。

「やっぱり火野さんは油断大敵ですね…」

「へえ、あの蹴り食らっても立ってられるのかよ」

「本気で行かせてもらいますよ！」

「おりゃあ　　！！」

ライカは諒に殴りかかった。

しかし、諒はライカの拳を握り、腕をまわし、足をはらって押し倒した。

まるで、男が女に責め寄るように…

見つめ合う二人…

「僕の勝ちですね」

「はは早くどけ！！」

ライカは頬を赤らめながら言う。

「す、すいません！」

諒は急いで立ちあがった。

「ふん、おい濤瀬。さっきのカウンターは鷺宮から習ったやろ？」

「え、ええ。一昨日に習いましたよ」

「そか。ならええねん。ほんなら今日はここまでや」

蘭豹がそういつと、みんな帰り始める。

諒は、射的シューティングで待つことにした・・・

真実

そして、茜がやってきた。

「諒、お待たせ」

「別に待ってませんよ」

「それじゃあ、はじめましょうか」

「はい！」

諒は銃を両手で構える。

「違うわ。片手水平持ちで撃ってみなさい」

「えっ！？どうして…」

「アンタ…中学生の時に真紀先輩から銃の特訓をしてもらってたでしょ？」

「なんで知っているんだらう…」

諒はそう思いながら、目を見開いた。

「その様子だと…凶星みたいね」

「どうして知ってるんですか？」

「真紀先輩から聞いてたからね。それに、秋葉原での構え方を見て、もしやと思ったのよ」

「あの場に居たんですか!？」

「ええ。居たわよ」

「ならなんで出て来てくれなかったんですか!？」

「ごめんなさいね、だけど、戦徒アミカを組んでいるからといって助けられるとは限らないわ」

「でも・・・」

「もし、私が死にかけていたら、依頼人クライアントを最優先に助けて、私を見捨てなさい」

「茜さんを・・・見捨てる・・・?」

「そうよ。それが戦徒アミカを組む中で一番辛い決断なのよ」

「茜さんも…姉さんを見捨てたんですか?」

諒は俯き問いかける。

「結果的にはそうなるわ…真紀先輩を助けることもできずに私は生き延びてしまった…」

それは事実よ」

「そうですか…。茜さん、僕は貴女も助けます。例え、戦場であつ

たとしても依頼人^{クライアント}

も茜さんも助けられるように頑張ります！！もう、僕みたいに悲しい気持ちにならないように……
誰も悲しまずに済むように……強くなります！ですから……これ
からも特訓をお願いします！」

諒は深く頭を下げた。

「諒……。フフツ、頼りにしてるわよ」

「は、はい！！よろしくお願いします！」

「さあ、射練^{シューティング}を始めましょう」

「はい！」

そして、諒は片手水平持ちで構えて放つ。

弾丸はすべて目標^{ターゲット}の肩にある六重円^{ポイント}の中央に中った。

「やっぱりSランクね」

「はい、両手撃ちだと少し標準が狂うんですよ……」

「真紀先輩といっしょね……。それがAランク止まりの理由ね」

「はい……」

「まあ、そのままAランクで通しなさい。いいわね？」

「は、はい。けれど何で・・・」

「ランク騙し（フェイク）をしておきなさい。両手撃ちでさっきの
ようなことが出来るまではね」

「わかりました」

「それじゃ帰りましょう」

「はい」

こうして二人は寮に帰った。

武偵殺しのバスジャック

翌日、諒は3kmランニングを終えて寮に戻っていた。

スポーツドリンクを冷蔵庫から取り出し、500ml?を飲み干した。

「ふう〜。大分体が慣れてきた」

すると、ガチャと奥の部屋に通ずるドアが開き、茜が起きて来た。

「あ、おはようございます、茜さん」

「おはよう…」

ちなみに、茜は朝が弱い。

「あの…大丈夫ですか？」

「眠い…」

茜はドアに凭れかかった状態で眠りかぶっている。

今は朝5時27分…

他の武偵すら寝ている。

すると茜は目を瞑ったまま、キッチンに立ち、冷蔵庫から野菜やトリ肉を取り出した。

そのまま、包丁を取り出して野菜とトリ肉を目を瞑ったまま切り始めた。

「ちょ、ちよつと茜さん！危ないですって！」

「大丈夫……」

未だに眠りかぶっている。

某バラエティで見たことがある眠りながら家事をする人のようだ・

諒は不安になりながらも見守っていた。

だが、諒はそんな茜のことが可愛く見えていた。

同居している者にしか味わえないレアな茜を諒は見ている。

そして無事に味噌汁が完成した。

「いただきます」

諒と茜は無言の食事を始めた。

数分後……

二人は食事を終えて、防弾防刃制服に着替えた。

朝6時just……

二人はランニング登校をした……

約2時間掛けて到着した。

茜は到着して早々、インフォルマ情報科3年の城島きしま美穂利みほりからお呼びがかかり、走って向かっていった。

諒は教室に向かった……

教室に入ると、みんなが騒いでいた。

諒はクラスメイトを一人ずつ眺めた。

そして数人のクラスメイトが居ないことに気づく。

いないクラスメイトは全員、バス通学生であった。

「ねえ、火野さん。どうしてバス通学生が居ないんです？」

「あ、諒！お前は無事だったのか！？」

「何がですか？」

「さっき放送が流れて《武偵高行きの通学バスが武偵殺しにバスジャックされた》という放送が流れて、一年は教室待機……。2・3年インフォルマの情報科は首都高速の閉鎖、

2年の強襲科アサルトは救助セーブに行った3人の援護、2年の車輛科ロジはバス手配。
……。そして…2・3年の衛生科メディカと救護科アンビュラスは万が一に備えて待機。
だそうです」

「その救助に向かったのは・・・？」

「俺の情報によると、二年強襲科アサルトSランク 神崎先輩。二年狙撃科ナイフSランク レキ先輩。そして信じがたいが…二年探偵科インクスタEランク 遠山先輩・・・」

「流石、情報科インフォルマAランクの萌君ですね…。やはり遠山先輩も入るのか…」

「やはりって・・・知ってんのか？」

「ええ。茜さんから話は聞いています。EランクとSランクの顔を持つ武偵…。この前、強襲科アサルト実習場に来た日の夜に聞いてみたんです」

「流石・・・情報科インフォルマSランクだな…」

「ちなみに、萌君の好きなタイ…」

「い、言うな!!」

萌咲は諒の口を塞ぐ。

すると、ピンポンパンポンと放送が流れる。

《一年A組 濤瀬 諒、一年A組 濤瀬 諒。大至急、C装備に着替え、

へりポートに向かえ！繰り返す！

大至急、C装備に着替えへりポートに向かえ！》

声は綴であった。

綴は諒の実質ランクを知っている。

「いつてきます」

諒は鞆だけを机に置く。

「死ぬんじゃねえぞ…」

ライカ達クラスメイトが心配そうな表情で諒を見る。

「死にませんよ…」

諒はそう言って教室を出て行き、アムト装備科でC装備に着替え、へりポートに向かった。

へりポートには綴が立っていた。

「涛瀬！」

「はい！」

「今回はお前一人だ！」

「どござして…」

「神崎はSランクが御所望だ。それに、鷲宮からもお前を選んでやってくれと言われたんでな。だから涛瀬…行って来い」

「分かりました！」

諒は2年 車輛科ロジの操縦するヘリに乗り込み現場に向かった…。

そして十分後…

諒の乗ったヘリはバスジャックされたバスの真上を飛んでいる。

バスの屋根にはアリアとキンジが云い争っていた。

諒はベレッタP×4 “ストーム”とバタフライナイフを確認し、バスの屋根に飛び乗った。

「先輩方、無事ですか!？」

「あ、アンタ!なんでこんなところに居るのよ!？」

「アリア、知り合いか？」

「茜の戦徒ミアミカよ！」

「一年かよ!！」

「そんなことより、二人とも!ヘルメットはどうしたんですか!？」

「運転してるやつに貸してる!！」

「さつきルノーに追突されたときにぶち割れたのよ！」

「それなら二人は中に避難を！」

すると、後ろから再びルノーが現れ、明らかにアリアに銃口を向けていた。

「アリアー!!」

キンジが叫び、アリアを庇う。

そして、ルノーに付けられたUZIから弾丸が放たれた。

諒は素早くストームを取り出し、片手水平持ちでフルオートで撃つた。

UZIから放たれた弾丸はストームの初弾に撃ちとめられ、残りのストームの弾丸はルノーのタイヤにあたり、ルノーはクラッシュした。

「な……」

アリアとキンジは驚いた。

諒は予備マガジンに替える。

「二人ともけがはありませんか？」

「あ、ああ……」

「やっぱり…アンタ凄いわ…」

「さっ、早く中へ！」

「わかった！」

アリアとキンジは、バスの中へ戻った。

諒はレキの乗っているへりに向かってペンライトで、モールス信号を打った。

爆弾は後方車両下 と送った。

あちらからも返答が来た。

了解
ラシヤ

諒も車内に入り、持ってきた治療キットで、被弾したドライバーの処置をする。

しばらくして、レキが爆弾を狙撃し、爆弾を海に落とすことに成功した……

その後、犯人が潜伏していたと思われるホテルを茜が見つげ出し、

インケスタ
探偵科や鑑識科（レ

ピア）がその部屋を調べたが手掛かりすら見つからなかった・・・

無理は禁物

昼休み………

あかり、志乃、ライカ、萌咲、諒は屋上に来ていた。

「で、結局なにも攫めずじまい……か……」

ライカはポカリ片手につぶやいた。

「そのようです」

「でも、鷺宮先輩は今も手掛かりを探しているみたいだぞ」

「そうなの？」

「ああ。だけど、今回ばかりは先輩もお手上げかもな」

「かもしれませぬ……」

すると、五人の携帯に通信科からの周知メールが届いた。
「コネクト」

《インフォルマ情報科二年 鷺宮 茜より、中間報告「今朝の襲撃車輛 ルノー
スポールスパイダー スピダー はフランスより盗難され、密輸
入された車両と判明。犯人に？がるような情報はなし。

尚、再び武偵殺しが事件を起こす可能性あり……以後、注意するよう
に。》

「流石……Sランク武偵……」

「たった短時間で襲撃車の入手ルートを割り出すなんてな…」

「流石、情報科最速の武偵だな…」
インフォルマ

「でも…犯人に？がる証拠はまだのようですね」

「まあ仕方ないですよ。それより、早くしないと午後の授業に遅れますよ」

諒の言葉に四人は時計を見る。

午後の授業まであと5分…

「ヤツバ！じゃああかり、また後でな！」

「遅れないでくださいね！」

ライカと諒はワイヤーで屋上から飛び降りた。

「ちょ！二人ともひどいよー！」

ちなみに屋上で弁当を食べようと言ったのは、あかりであった。

すると、諒がワイヤーを戻して上がってきた。

「まったく…間宮さん、早く行きますよ！」

「う、うん！それじゃあ二人とも、また放課後ね！」

「は、はい…」

志乃は諒に殺気ある目線を向ける。

諒は気づかないふりをして、あかりを担いで屋上から飛び降り、強^ア
襲科^{サルト}実習場に

向かった。

諒が実習場に入ると、アリアが遅い！！というような表情で諒に近づいてくる。

「あの…神崎先輩？」

ちかい・・・小さい顔が近い・・・

「アンタ、私と闘いなさい！」

「えっ・・・」

周りの生徒がざわめき始める。

おいおいあり得ない・・・

SランクがAランクに挑戦を持ちかけている・・・

しかも有名な神崎・H・アリアが・・・

「すみません、蘭豹先生。今日は疲れてるみたいです……。神崎先輩が僕に挑戦してきている幻聴が聞こえるんですが……」

「幻聴やない。ほんまに挑戦を申しこんどるで」

「いいから私と闘いなさい!」

「お断りします!」

「何ですよ!ああ、逃げるのね……」

「はい、逃げますよ。めんどくさいですし……」

「か、風穴!」

するとアリアはガバを二丁取り出し、諒に放った。

諒は素早くストームを取り出し、片手で構えフルバーストでアリアのガバ二丁の弾丸を撃ち落とし、懐に入り、アリアの顎にストームの銃口を突き付ける。

「な……」

「ストームの装弾数は20+1……。つまり、神崎先輩のガバメントの一斉射撃で14発撃ちましたが……。まだ後6発は残っています……。そして……。もし僕が武偵殺しなら撃つてます……」

諒はそう言うと、銃を下した。

周りは騒然としていた。

「おい…諒…」

「はい？」

「今のって…」

「え？」

「アンタ、何者なの!？」

アリアが目を輝かせながら問いかけてくる。

や、やりすぎた

!!!!!!!!!!!!!!

!

・
・
諒がこの後、アリアに付きまとわれたのは言っまでもないだろう・
・

武偵殺しの真実

その後、アリアから逃げるために走った距離は10km…。

早朝3kmランニング三日分は走り切った諒は、とうとう諒は教務^{マスタ}科の綴^{イス}のところ¹に逃げ込んだ…。

「はあ…」

「ここでため息をつくな…。最初にやってきたのが神崎であったとしてもカウンターでSランクの姿を見せたのが悪いんだよ」

「反省しています…」

「ならもう任務^{クエスト}と緊急時以外では見せるなよ…」

「はい…」

教務科^{マスタ}…それは武偵高教師が所属している科であり、教務科^{マスタ}のエリアには生徒は呼ばれるか、用事があるかしないと足を運びたがらない「茜と諒以外」

しばらく、諒は茜が来るまで綴の手伝いをしていた。

「涛瀬、もうこれで最後だ」

「ど、奴隷って！いつの時代ですか！？今は平等の時代ですよ！！」

「まあ、大丈夫よ。それじゃあ、帰る前に行くところがあるから行くわよ。」

それでは綴先生、また明日」

「おお、気をつけて帰れよ」

そして、茜と諒は教務科マスターズを後にした…。

二人は歩いて、とある人物のところに向かった。

「あの…茜さん」

「なに？」

「どちらに行かれるんですか？」

「第三男子寮にいる遠山 キンジのところよ」

「と、遠山先輩のところですか！？」

「ええ。彼に何かわかったら連絡するように言われてたから…」

「ということは何かわかったんですか！？」

「まあね。次武偵殺しが現れるジャック事件の予測がね。だけど、このことは遠山キンジと私たちだけの秘密よ」

「どうしてですか!？」

「死人はできるだけ少ない方がいいでしょ」

「そ、それはそうかもしれませんが…」

「まあ大丈夫よ。キンジはアンタと同じで隠しSランクの武偵だから」

「う…」

信じがたい・・・信じがたいが茜さんがそういつのなら本当なのだろう・・・

茜さんは世界のネットワークを知り尽くした情報科インフォルマなのだ・・・

茜の二つ名【ミステリインフォルマ謎乃情報科】・・・

自分のことはできる限り明かさず、他の者の情報はすべて知り尽くす武偵の事をいう。

世界には、8人程度しか居らず、ほとんどがRランクである。

しばらくして、キンジの部屋の前に到着し、チャイムを鳴らした。

すると、ガチャとドアが開いた……

「は〜い……って茜とお前か……」

「言われたとおり、情報持って来たわよ」

すると茜は鞆からUSBを取り出した。

「流石…Sランクは早いな。まあ上がれよ」

「はいはい」

「おじゃまします」

茜と諒はキンジの部屋に入る。

そしてキンジはPCを立ち上げ、茜から受け取ったUSBを読み込み、見始める。

茜も自前のPCを取り出し、立ち上げた。

「遠山先輩、台所をお借りしてもよろしいですか？」

「あ、ああ構わんが…なにするんだ？」

「珈琲でも淹れようかと思ひまして……」

「それなら、右側の棚にインスタントコーヒーが入ってるから使っ

「ていぞ」

「わかりました」

諒は言われた棚からインスタント珈琲を取り出し、淹れ始める。

もちろん、3人分・・・

そして、諒は茜とキンジに角砂糖を添えて、置く。

「あんがとよ」

諒はにっこり笑い座る。

茜はたった一口・・・たった一口飲んだ・・・

すると茜は、口を押さえて洗面台に走って行った。

「あ、茜さん!?!」

諒は茜を追いかける。

「う...」

茜の表情は青ざめていた・・・

「だ、大丈夫ですか!?! なにか変なものでも・・・」

「不味い・・・」

「え……」

「何なのアレ……ギリシャ珈琲？いや、それ以下かも……」

諒は思った……

茜さんは結構珈琲と紅茶にシビアな味覚らしい……

茜は嗽を3回程度して、落ち着き、戻った。

「茜、大丈夫か？」

「ええ。やっぱりインスタントは苦手だわ……」

「やっぱり紅茶に引き続き、インスタントシリーズはダメなんだな」

「ええ……」

「そうなんですか!？」

「去年にインスタントの紅茶を飲ませたら、アンビュラス救護科を呼ぶ羽目になったことがある」

「そこまで……。っていうか遠山先輩!!知ってるんなら言っってくださいよ!!」

「悪い、忘れてた……」

おいおい……この人は本当にSランク武偵なのか……と諒は疑い始めた……

「それより…どうするの？」

「何がだよ？」

「アリアよ。あの子明日、ロンドンに帰るらしいわ」

「そ、そうなんですか!？」

「ええ。わざわざ言いに来たもの。明日、午後6時40分発のチャーター便で戻るみたいよ。」

チケットの手配を頼まれたし…。」

茜はチケットの控えを見せる。

△羽田 倫敦 PM6:40発 charter 神崎・H・アリ
ア S34 B SPT }

「スペシャルチケットSPTつて…何十万すると思っっているんですか!？」

「前金をもらっていたから大丈夫よ。そして…これがキンジの分」

茜はチケットをキンジに渡す。

△羽田 倫敦 PM6:40発 charter 遠山 キンジ
S34 A SPT }

「これ…。」

「ア・リ・ア・と相部屋よ。これは私からの依頼^{クエスト}…。アリアを護りなさい……。」

そして武偵殺しを捕まえてみなさい」

「茜さん……」

「わかった……。この資料から察するにターゲットはアリアなんだな……」

「ええ、そうよ。アンタのお兄さんも多分、アリアと同じ立場だったと思うわ」

「次はハイジャックってことかよ……。まあ何とかするが……。ベレッタのメンテお願いしていいか？」

肝心な時にジャムツたら元も子もないからな……」

「わかったわ。なら今晚は二人して泊めてくれる？」

「ああ、メンテをタダでしてくれるんなら安いもんだ」

「そう、ならベレッタを貸して」

「ああ」

キンジはベレッタを茜に渡した。

ちなみにキンジのベレッタの違法改造を受け持ったのは茜である。

そして、キンジと諒は午後10時にベッドで眠りについて、茜は諒のベレッタM92Fと

諒のベレッタP×4“ストーム”それに自分のワルサーP88をす
べてメンテを終えて、
午後11時にソファで一夜を過ごした・・・

真紀の真実

翌日・・・

諒が目を覚ますと、枕元にベレッタP×4“ストーム”とメッセージカードが置いてあった…。

「あれ、何だろう?」

諒はそのカードを手に取り読む。

《諒へ…。先に行ってるから、遅刻しないようにね。P・S・別にランニング登校はしなくてもいいから by 茜》

「早くないですか・・・茜さん・・・」

ちなみに今は午前5時23分・・・

キンジはグッスリ寝ている。

諒は立ち上がり、外を眺める。

東京の朝は人通りが少なく、時折、霧の中から鳥が飛び出てきたりと、

まるで倫敦の朝のようであった。

諒がふと、下を見ると、キンジの部屋を見上げている女子武偵高生

が居た。

諒と目が合った瞬間、不気味な笑みを見せて睨んでくる。

諒は背筋の凍るような恐怖を感じた。

その女子武偵高生は、金色の髪を靡かせて、霧の中へと消えていった。

諒はハッと我に返り、ストームを持って、女子武偵高生が居た場所に走って向かった。

だが、もうすでに誰もいなかった。

「武偵殺し……。けどなんで遠山先輩の部屋を……」

「それはパートナーだからだよ、ま・こ・とくん」

諒は慌てて後ろを振り向いた瞬間、二発の弾丸が防弾制服にめり込んだ。

諒は衝撃で吹っ飛ばされた。

「い……ったい……なん……で……」

諒は気絶した……。

諒は意識が朦朧とする中、微かに呼び起こす声が聞こえた。

「……………い！……………おい！起きろ！」

「……………お・やま……………先輩……………」

諒は微かに意識を取り戻し、目を開けた。

「おい！大丈夫か！？」

「僕は……………なんで……………イタツ！」

諒は起きようとしたが、腹部に激痛が走った。

「無茶すんな！ただでさえ、バットでぶん殴られた様な怪我をしてんだ……………」

「どうしてこんなことに……………」

「俺が知るか……。さっき起きたら下でお前が倒れてたのを通りがかつた人が見つけて、

救急車を呼ぼうとしたが、アンビュラス救護科の暦さんが見つけて止めてくれてここまで運んでくれたんだ」

「暦……………先輩？」

「あ、気がついた？まったくあんなところで倒れて……………茜に知られ

たらどうするつもりだったの？」

「すみません……」

「で、誰にやられたんだ？」

「おそらく、武偵殺しだと思います……」

キンジと暦はその言葉に、目を丸くした。

「ど、どういうことだ!？」

「僕にもわかりません……。ですが……そんな感じがしたんです……」

「顔は見たの？」

「はつきりとは覚えていないんですが、確か金色のロングヘアだったと思います」

「金色のロングヘア……ね……」

暦は顎を親指と人差し指で固定するように考える。

暦……坂上（よこがみ） 暦は記憶力と技術面ではSランクなのだが、

患者に法外な治療費を請求するため、Aランク留まりなのである。

ちなみに、茜のことを信頼しているため、治療費の請求は茜と茜の友達にはしない。

「ダメ……該当者なし……。強いて言えば、りこりんね……」

けど、あの天キャラがこんな大それたことはしないとと思うわ」

「そうだな…。ええと……」

そういえば、自己紹介してなっかたや…

諒はそう思う。

「涛瀬 諒です」

キンジと暦は目を見開いた。

「涛瀬…って、真紀先輩の…」

「はい、弟です」

「…悪い。知らなくて……その……」

「なんで遠山先輩が謝るんです？僕は武偵殺しを恨んでもいません。僕は純粹に武偵になりたいんです。

それに、茜さんと戦徒アミカを組んで見たかったですし……」

「どうして？」

「あの姉さんが認めた方でしたから……。それに……一緒に居ると安心するんです……」

「信頼ってやつね……」

「それより、学校に行くぞ」

「はい」

諒は、暦からもらったコルセットをつけ、武偵高にキンジと向かう。
ちなみに暦は、オートバイ<スズキ 隼>に乗って行った。

東京武偵高校第三男子寮前 バス停……

「よ〜キンジ!と……誰だ?」

彼は武藤 剛気……キンジの親友(?)らしい。

・ 乗り物オタクで乗り物とつくものなら何でも乗りこなせるらしい……

「茜の戦徒だ」
アミカ

「初めまして、武藤先輩。 涛瀬 諒です」

「と、涛瀬!??」

あれ?なんだか脅えている……なんでだろう……

諒は首をひねる。

「ま、まさか真紀先輩の!??」

「そっだ」

さらに脅える武藤・・・

「なんで皆さん脅えるんですか？」

「それはお前の姉さんのことをみんなよく知ってるからな」

姉さんは武偵高で何をしていたんだ!?

諒も想像しただけで背筋が凍った。

そして、武偵高生がたくさん乗っているバスに乗り込み、
諒の知っている不知火 亮が居た。

「あれ？ 涛瀬君、めずらしいですね」

「不知火、知ってんのか？」

「ええ、強襲科アサルトでは有名ですしね」

「あはは・・・」

諒は苦笑する。

「有名？」

「神崎さんを追い詰めたインターン...ですよ」

「不知火先輩!!!」

武藤とキンジは絶句したまま固まっている。

「すみません、つい口が滑ってしまって・・・」

「そのせいで教務科に逃げ込む羽目になったんですから・・・」

諒は不知火の耳元に囁く。

「す、すみません。それより、鷺宮さんはどうしたんです？」

「ああ、もう学校にいつてますよ」

「随分早いな」

あ、遠山先輩が復活した・・・

「まあ今までにも何回かありましたから気にしませんか・・・。
でも、今日はやけに早かったですけど・・・」

「いつもはどのくらいなんだ？」

あ、武藤先輩も復活した・・・。

「いつもは五時半ですよ。今日は4時くらいに出て行ってますね」

諒はメッセージカードを見ながら言う。

「分かるのか？」

「はい、茜さんに強襲科を初め、すべての学科のいろはを教えるも
アサルト

らいましたから……」

「流石、茜さんですね」

そんなこんなで、武偵高に到着した……

諒の決意

諒はキンジ達と別れて、自分の教室に向かった。

教室に入ると、ライカのひつつき虫である、島麒麟が居た。

「おはようございます」

「お、おお」

火野さん・・・いきなり疲れてる・・・

諒はお気の毒にと思いつつ、ドンマイと心の中で笑い、席に着いた。

そしていつものように授業を受けて、午前が終わる。

アサルト
強襲科訓練場に入り、シューティング射的で射練を始める。

両手撃ちセミオートで一発一発丁寧に中央を狙う。

しかし、片手撃ちよりも精度が落ちている。

「やっぱり、手振れが起きる・・・。やっぱり...あの時の記憶が・・・。
いやいや！そんなことで手振れなんか起きない！！これは精神的なモノなんだ！」

諒はそう自分に言い聞かせた。

そしてもう一度構えた時、横にライカが来た。

「よーおー諒」

「火野さん」

「どうして両手撃ちなんだ？この前みたいに片手撃ちで撃てばいいじゃないか」

「人には乗り越えないといけない壁というものがあるんですよ…。
それに…二丁^{ツイン}じゃないと蘭豹先生が認めてくれそうにないですし…」

「確かにな…。」

そんなこんなで、一発も中央に中らないまま、大雨が降る中帰った。

寮に帰り、電気を点ける。

すると、テーブルにメモが置いてあった。

《今日は徹夜になりそうだから、帰れない。夜食はレンジに作ってあるから食べて》

と書いてあった。

「徹夜って…武偵殺しのことかな…」

するとピンポンとチャイムが鳴る。

「はいはい、待ってくださいね」

と諒が玄関のドアを開けると、ずぶ濡れのあかりが居た。

「ま、間宮さん!!どうしたんですか!?!と、とにかく中に入ってください!!」

あかりは無言のまま部屋に上がった。

あれ?もしかして…間宮さん、泣いてる?

「と、とにかくシャワーを浴びてください!!」

諒はバスタオルを渡しながら言う。

「ねえ…諒君…。アリア先輩知らない?」

諒は、昨日のことを思い出した。

「どうしてそんなこと聞くんですか?」

「昨日から連絡が取れないの…。教室に行ってもいなかったし…。ねえ知らない!?!」

あかりは諒の制服を掴みながら、涙を瞳に溜めて諒の顔を見上げる。

諒は目を反らす。

「すみません、僕も知らないんです…。お役に立てずすみません…」

諒は辛かった。

だけど…これだけは言っておきたい…

「ですが、これだけは言えます。神崎先輩は間宮さんを見捨てていませんよ。絶対に帰ってきますよ。

もし、いつになっても帰ってこなかったら、僕といっしょに捜しに行きましょう」

諒は目を合わせ、断言する。

「本当…？」

「ええ。必ず…」

そうだ…。僕が武偵になったのは、行方不明の姉さんを捜すためだ！

だから…武偵になる！

「ありがとう…諒君」

あかりは安心したように、諒の胸に体を預けた。

「間宮さん、風邪を引いたらいけませんから、シャワーを浴びて来てください」

「うん…わかった…」

諒はあかりを浴室に案内した後に、チェンジ転装専用の女子制服を自分のクローゼットから取り出した。

下着はあかりのを洗濯機に急速乾燥で乾かした。

正直、諒は茜ので慣れている。

諒は制服を脱衣所の網棚に置く。

「間宮さん、替えの制服置いておきます。下着は洗濯機の中に戻りますから」

「あ、ありがとう…」

恐らく、また神崎先輩のことを考えているな…

諒はそう思った。

普通、<下着>って言ったたら恥ずかしがるのが、普通だろう…

諒は少々、恥ずかしくなる。

しばらくして、あかりが浴室から制服を着て出て来た。

やはり、少し大きかった。

「この制服って、着てよかったの？」

「ええ、心配ありませんよ。それ、僕のですから」

「えっ!?!」

あかりが退いた。

「安心してください。女装癖はありません。その制服は、潜入捜査の時に着れるようにと、茜さんが僕にくれました」

「ご、ごめん！なんか勘違いしてて・・・」

「いいですよ。それより、紅茶淹れますね」

諒はソファから立ち上がる。

「べ、別にいいよ！」

「今のあなたには必要ですよ。今のあなたには迷いがある。一度リラックスした方がいい」

諒はそういうと、ダージリンティーを淹れ、ソファに座らせたあかりの前のテーブルに置く。

「ありがとう」

「どづいたしまして」

諒はあかりの隣に座る。

あかりはダージリンティーを息を吹きかけ冷まして飲む。

「おいしー...」

「それは良かったです」

「あのね、諒……。今日はその……。いきなり押しかけてごめんね……」

あかりは申し訳なさそうに言う。

「別にいいですよ。僕だってマスターズ教務科に押し掛けた経験がありますから……」

「えッ!? そうなの!」

「ええ、去年の話です。僕の姉が武偵殺しのカージャック事件で行方不明になって、捜査が打ち切られた日……。僕は我を忘れてマスターズ教務科の綴先生に掴みかかったんです。どうして捜査を打ち切るんだとか叫んで、終いには麻酔弾で眠らされて、気づいたら病院のベッドの上……。綴先生は一晩中寝ずに目を覚ますのを待ってくれていたんです。そんな綴先生を見ていたら、なんだか怒る気にもなれず、死体が上がっていないことを逆に生きていると自己暗示を掛けて、武偵殺しのことも恨まずに姉を探すために強い武偵になって、生きている姉さんとパートナーになりたいと思っただんです……」

あかりはじっと諒を目を見開いて見ている。

「す、すいません……。余計な事でしたね」

「ううん……。やっぱり諒君はすごいや……。そんなにつらい過去があるのに強く生きてる……」。

私はまだまだ弱いままだよ…」

「人は個人差はありますけど、誰でも強くなれますよ。だから、神崎先輩の帰りを待ちましよう」

「うん…」

「家まで送ります…」

諒は、タクシーを呼んで、あかりを家まで送り届けたのち、寮に戻った……

その日の夜、やはり武偵殺しが現れたらしい…

だけど、神崎先輩と遠山先輩が解決、犯人には逃げられてしまったらしいが……

しかし、諒にとっては犯人逮捕なんかはどうでもよかった。

姉さんの二の前だけにはなっほしくなかった……

ただそれだけ……

女装癖はありません(ショート)

翌日……

諒はいつものように学校に登校する。

教室に入った瞬間、あかりがうれしそうに鼻歌を歌っていた。

「あ、諒君おはよう!」

「おはようございます。あ、これ乾きましたんで……」

諒は紙袋に入れた制服を渡した。

「ありがとう」

「あかりちゃん…その制服どうしたの?」

うっわぁ、佐々木さん、ヤンデレモード発動中だ……

流石の諒も後ずさる。

「これ?諒君に洗濯してもらったんだ」

間宮さん!!それは禁句ですよ!!

諒は覚悟を決めた。

「ふん……」

志乃は日本刀を取り出した。

「さ、佐々木さん！！誤解です！」

「ならなんで諒君があかりちゃんの制服を持って来てるんですか！？」

「し、志乃ちゃん！私が昨日、鷲宮先輩のところにも雨の中行って、濡れたから風邪をひかないようにってシャワーを貸してくれたただだよ！」

間宮さんはその発言をあつち側に取れる発言と知っていて言っているのだろうか……

いや、天然間宮にはそんな考えが生まれるわけがないな……

「諒君……」

こ、今度は物干し竿ですか！？

これはストレートに……

「なら正直に話します……。今、間宮さんが着ている制服は僕の転装チェンジ専用の制服なんです……」

「えっ！？」

志乃は昨日のあかりの如く退いた。

「まあ、別に気にしませんが一応補足しておきます。僕に女装癖はありませんから」

「そうですね」

やっぱりみんな、そう思うんだな・・・

諒はそう思いつつ、席に着いた。

元カノとの再会

とある休日……

諒は実家である東京都墨田区に両親の墓参りに来ていた。

手を合わせ、黙想する。

「ごめんね……。でも、僕は姉さんを探すし、強くなる。だから見守っていてね」

諒はそう言いながら、皆目する。

そして立ち上がり、桶を住職に返し、渋谷に向かうため、バスに乗った。

しばらくバスに揺られること数十分、バスから降り、来たことのない住宅街に入りこんでしまった。

「迷った……。ショートカットできると思ったんだけどな」

諒は、知らないアパートの前で携帯ナビを開くが、電池が切れた。

「災難だ……」

「ののか、早く行こ」

あれ？どこかで聞いたことのある声がするな……

諒は振り返りアパート二階に居た少女に驚いた…

「ま、間宮さん!!」

「あれ!? 諒君!」

「どうしてここに…」

「それはこっちのセリフ!」

すると、もう一人部屋から出て来た。

「あれ、お姉ちゃんの知り合い?」

「うん、同級生の涛瀬 諒君だよ」

「初めまして…」

今更だが、二階から降りて来て欲しい…

なぜなら、絶対禁止区域が見えそうだからである…

諒は目を反らす。

あかりの妹は、気づいたらしく、スカートを押さえる。

「話は降りてしようよ、お姉ちゃん」

「あ、そうだね」

間宮さん…妹さんのように気づいてくださいよ…

諒はそう思いながら呆れた。

間宮姉妹は、二階から降りて来た。

「あの、いつも姉がお世話になっていきます。妹の間宮 ののかとい
います」

「はじめまして。でも間宮さんにこんなしつかりした妹さんが居た
なんて…知りませんでしたよ」

ああ、できれば姉がしつかりしてほしい…

諒はそう思いながら、笑顔を見せる。

「その言い方って私がしつかりしてないように聞こえるんですけど
…」

ヤバッ！なんでこんなことは鋭いんだ！？

「あっ！今バレたって顔した！」

「してませんって！」

「フフツ、お姉ちゃんと濤瀬さんって仲がいいんだね」

ののかちゃん、まさか付き合っているとか冗談言わないよね？

「まさか二人…付き合ってるの？」

言いやがった・・・

「付き合ってますん!!」

ハモってしまった・・・

「息もぴったり」

「はあ。。。ののかさん、あまりからかわないでくださいよ。。。お姉さんがオーバーヒートしかけてますから・・・」

あかりは顔を真っ赤にして湯気が出ている・・・

「す、すいません」

ののかはやり過ぎちゃったと言わんばかりの苦笑いをした。

「でも…間宮さんがつらやましいです…」

「えっ?」

「実は僕にも妹が出来るはずだったんです…」

「できるはずだったって…」

「す、すいません!この話は止しましょう…。それより、道を探ねたいんですが…」

「いいよ。どこ行くの?」

「渋谷です」

「えっ！？私たちも今から渋谷に買い物に行くところだよ」

「そうなんですか？」

「はい。ちょっと服を見に行こうかなって。よかったら一緒に行きませんか？」

「えっ！？でも姉妹水入らずなのにお邪魔しては・・・」

「折角だから一緒に行こうよ！」

「わ、わかりました」

こうして、諒はひょんなことから間宮姉妹に捕まった。

歩くこと数十分・・・

諒と間宮姉妹は渋谷109に到着した。

諒は自分の見たかったアクセサリショップに居た。

諒はショーケースをのぞきながら値段を見ながら絶句する。

¥10,000が最安価で¥900,000が最高価であった。

高い・・・

諒はそう思いながら溜息をした。

「お客様、何かお探しでしょうか？」

「い、いや。ただ見ているだけというか何というか・・・」

「そうですか。それでは何かありましたらお声掛けしてください」

「は、はい」

ヤバかった・・・。もし断りずらい空気になったら、対処できなかった・・・

昔は、篠野さんと来ていたしな・・・

「い、いやその！見ているだけで・・・」

諒はその声に聞き覚えがあった・・・

そして諒はその声の主の姿を見た。

一般高校の制服を着た黒髪のロングヘアの少女が諒に話しかけてきた店員が責め寄っていた。

「篠野・・・さん・・・」

「涛瀬・・・」

二人は目があった。

「あの、お連れ様ですか？」

「ち、違います！」

篠野は顔を赤くして、否定する。

に、逃げよう・・・

諒はそうっと店を抜けようとした時、間宮姉妹が諒に気づいて入ってきた。

ダブルピンチ・・・

「諒君、ここで何やってんの？」

「え、ええツとですね！その・・・」

「なあ涛瀬・・・」

ヤバい！篠野がこっちにブラックオーラを放ちながら近づいて来る。

「は、はい！」

「その子たちはアンタの何なの？」

篠野は指定鞆から短木刀を取り出した。

「が、学校の同級生とその妹さんですよ！」

「ほ、ほんと？」

「ほ、ほんとだって！ねえ間宮さん！」

「そうだけど・・・」

「ね！篠野さん」

「そうか…。なら安心した・・・」

「あの、涛瀬さん。こちらの方は？」

「ええつと…：僕の元カノです・・・」

間宮姉妹は驚いた。

「こ、コラッ！涛瀬！そんな・・・人前で…：その…：言わなくても・・・」

篠野はボツと湯気を出して赤くなる。

「それ本当なの！？諒君！」

「はい。ですが…：私たちは行き違いにより別れたんです・・・」

「べ、別に私は・・・」

「とりあえず、場所を移動しましょう。ここでは話したいことも話せない・・・」

「わかった……」

こうして、四人は場所を4階喫茶店に移した。

「じゃあ、篠野さんのお母さんが武偵である諒君のことを認めないってことなんだ」

「ああ。私の父は武偵であったが、6年前に家に押し掛けて来た殺し屋に殺されたんだ……。その時、私と母を助けてくれたのが涛瀬と涛瀬の姉だった。放火されて火の海だった部屋から私を涛瀬は助けてくれた……。だが、母は武偵というモノを嫌っているんだ……」

「そして、僕は武偵になるか、一般市民になるか迷ったんです。しかし、姉が行方不明になって、武偵になると決心し、篠野さんとは別れたんです……」

「そうだったんですか……」

「だが涛瀬、私はお前のことを……その……す……す好きなんだぞ！」

「僕だって、篠野さんのことは好きです。ですが、世間はそうはいかない……」

「だが涛瀬…」

「もう…終わったんですよ…僕たちは…」

諒は悲しそうな顔をする。

篠野は今にも泣きそうな顔をしていた。

「さようなら…」

諒はそういって、立ち上がり、代金を置いて喫茶店を出て行った。

「と、涛瀬さん！」

ののかは諒を追いかける。

あかりは戸惑ったが、諒を追いかけた。

篠野は一人になり、堪えていた涙を流した…

2階フロア…

「諒君！あれはひどすぎるよ！…！」

「お姉ちゃんの言つとおりです！…！」

「僕だって、言い過ぎだと思いましたがよ…。でも…もう後戻りはき

かないんですよ…」

「涛瀬さん…」

すると、あかりの携帯に武偵高周知メールが届く。

諒は携帯を取り出すが、電池切れであった。

「なんです？」

「渋谷109に爆弾を仕掛けたというタレコミが武偵高に来たそうです…。」

それで付近に居る武偵は至急、店に居る人たちを避難させるようにつて…」

「わかりました。私は案内所に伝えてきます。間宮さんとののかさんは避難してください」

「わ、私も武偵だよ！」

「間宮さんは、ののかさんを守ってください」

「でも…」

「あかり！貴女にもしもの事があつたら誰がののかを護るんだ！？」

「諒…君…」

「貴女は姉として武偵としてのののかを守る義務がある！それでも行かないなら風穴開けんぞ！！さっさと行け！おまえは外に居る奴ら

を安全な距離まで離せ！！いいな！！」

「諒君…。うん！分かった！行こうのか！」

「う、うん！」

間宮姉妹は、ビルから脱出した。

「ちとと…」

諒は急いで案内所に行き、館内放送で避難を呼びかけた。

店員は最後まで、客の避難誘導をした。

そして、諒一人になる。

諒は残っている人はいないか確認する。

その瞬間、三階洋服フロアが爆発した。

その後、火が洋服に燃え移り、火事となった。

諒は急いで、火の海となった三階フロアに逃げ遅れた人はいないか、呼びかける。

すると、いやあ

！という叫び声が聞こえた。

その声は6年前も聞いたことがあった・・・

「美穂・・・美穂オ
！」

諒は声のする方に走って、叫び声のする方に向かう。

そこには、脅えって丸くなっている篠野が居た。

「美穂！」

諒は篠野に近寄る。

「諒！こ、怖いよ！」

篠野は脅えながら諒に抱きつく。

「大丈夫だよ…僕がついてる…」

諒は篠野をお姫様抱っこして、屋上に向かった。

109は八階建て・・・

諒は気を失った篠野を下した後、もう一度中に戻り、
レストランフロアからテーブルクロスをはぎ取り、屋上に戻った。

そして、諒は篠野を自分の体にテーブルクロスで結び、常備してい
たワイヤーをテーブルクロスに結ん
で、手擦りを乗り越えて、立つ。

「ん……とう……せ？」

「気がつきました？」

「なななんでこここんなことに!？」

「美穂……さっきは言い過ぎた……。ごめん……。」

だから、その償いに君と婚約するよ……。だから……。生きて帰ろう」

「っ、償う必要はない!ただ……。諒が居るだけで……。それでいい……。」

美穂……。もし、今日出会わなかったら言えなかったらうな……。

でも、今は美穂を護る……

必ず護る!

諒は決心した。

そして……

二人はキスを交した。

もちろん、お互いファーストキスである。

もう、逃げ道はない……

三階は火の海……四階から八階までは恐らく煙で一杯だ……

「いくよ、美穂」

「あ、ああ」

そして…諒は壁を走るように、降りる。

大体、三階ぐらいのところでテーブルクロスを帆のように広げ、着地した。

「た……助かった……」

諒と篠野はホッと溜息をした後、微笑みあった。

その後、間宮姉妹と救護科アンビュラスの生徒が駆け寄ってきた。

二人は念のため、武偵病院に検査入院することになった。

もちろん、曆には診断結果用紙を丸めて叩かれ、先生やアリア、キングジ、茜には呆れられつつ褒められ、綴には最新のネタが出来たと感謝され、いろんなことを言われた。

これが父さんと母さんの怨念か……

諒は鳥肌を立たせた。

「でも・・・そんなに悪い気はしないな・・・」

諒は屋上のベンチに座りながら空を眺めた・・・

こうして、一日が終わった・・・

元カノとの再会（後書き）

篠野 美穂（15）
さきの みほ

身長：155cm B：B70

諒の元カノ。だが、よりを戻して彼女。

6年前に武偵であった父を殺し屋に殺された揚句、家を放火された。

その時、諒と諒の姉である真紀に助けられた。

諒が武偵高進学を選んだため、離れ離れになった。

一般の高校に通い、弓道と剣道を掛け持ちしている。

そして、偶然にも109で再会し、別れを告げられたが、

再び付き合うことになった。

諒に想いを寄せている。

篠野の悩み（前書き）

今回は篠野 美穂目線です。

篠野の悩み

あの事件から三日が経ち、いつものように篠野は女子高に通っていた。

授業を聞きながら、黒板に書かれたことをノートに写す。

学校が終わり、美穂は部活に来ていた。

美穂は弓道と剣道を掛け持ちしているため、忙しい。

剣道三段、弓道五段を持っている。

その為、中学時代、結構試合で準優勝していた。

そして、部活を終えた美穂は荒川河川敷を同じ部活動をしている二人の同級生としゃべりながら歩いていた。

「ねえねえ、一昨日の渋谷の爆発事件知ってる？」

美穂の同級生、渡里わたり 紗江さえが話し出した。

「ああ、あの事件？あれで一人、武偵に助けられたらしいな」

そう答えたのは、御坂みさか 琴乃ことの。

結構、情報通である。

「そうそう。それで助けられたのが、桜浪女学院（じやうりやう)の生徒らしいんだ」

「ふうん……」

まずいぞ……。

これで私だということがバレれば、必ず質問攻めにあう！

ここは、悟られないようにしなくては……

美穂は心の中で考える。

「美穂オ、さっきから何難しそうな顔してんのオ？」

「べ、別にそんなことはない！」

「ふうん……。で、さっきの話なんだけど、その助けた武偵が諒君に似てたんだよね」

「諒？」

琴乃は首を傾げる。

「あ、琴ちゃんは知らないね。諒君っていうのは、美穂の元カレだよ」

「マジかよ!?!」

「そっだよ。ね」

紗江は美穂に聞きしぐさを見せる。

「あ、ああ……」

本当はよりを戻したんだがな……

「へえ、そうなんだ。結構美穂もなかなかやるなあ。よりを戻す気はないのか？」

「あ、あるが……。その……と、涛瀬はぶ、武偵だから……。その……か、母さんがな……」

「あーごめん!忘れてて……。その……」

「べつにいい」

すると、美穂は視線を感じた。

急いで振り向く。

しかし誰もいない…。

「どうしたの？美穂」

「い、いや・・・」

「またあの視線か？」

「ああ・・・」

「ならさっさと帰るぞ・・・」

「そうだね。早く帰ろう」

「そうしよう・・・」

最近、美穂は誰かに見られているような視線を感じるようになっていた。

そのことを警察と警学校に相談を持ちかけたが、証拠と目撃証言がないため、捜査できないと断られた。

紗江と琴乃と別れ、母と暮らすマンションの部屋に向かった。

部屋に入る。

「ただいま・・・」

美穂は、靴を靴箱に容れた。

「おかえり。今日はどうだった？」

「今日は6回…」

「そう…。もう一度、警察に相談してみましよう…」

「どうせまた断られるだけだって…」

「でも…」

「母さんはまだ、武偵を嫌っているのか？」

「…ええ。だって関わったらまたあの時みたいに…」

「それは母さんだけの考えでしょ！」

「そ、そうだけど…」

「母さんが…母さんが涛瀬と私の壁なんだ…」

「諒君はあなたを裏切ったのよ…。一緒に同じ高校に進む約束をしていたのに、

突然、彼は武偵高に進路を変えた…」

「裏切ったんじゃないんだ！！涛瀬は…。諒は…私の事を好きと言ってくれた…」

裏切ったとは私は思わない…」

「…わかったわ。明日、武偵高に相談しに行きましょう…。それに…諒君に謝らないとね…」

「母さん…。うん！」

こうして、美穂と美穂の母は明日、武偵高に行くことを決めた。

翌日、美穂は制服に身を包み、母と共にタクシーで武偵高に向かった。

そして、武偵高に到着した。

まだ午前のため、銃声はしていない。

「さあ行きましょう」

「う、うん」

二人は校内に入り、マスタース教務科に向かった。

「あの…すいませんが、どちら様ですか？」

二人はその声に驚き振り向いた。

しかし、誰もいない。

「さっき……声が聞こえなかった？」

「え、ええ」

「こっちですよ」

二人は正面に目を戻すと、黒に近い紅髪でセミロングヘアで、ダークブルーの瞳色をしている少女が居た。

「あ、あの……」

「ああ、すみません。私はこの生徒で、鷺宮 茜と申します。あなた方はクライアント依頼人ですか？」

「え、ええ。そうですが……」

「ならこちらへどうぞ。案内いたします」

「すみません……。よろしくお願いします」

茜は二人をマスターズ教務科の綴のところに案内した。

茜はマスターズ教務科のドアをノックする。

「おお、入っていいぞ」

茜はドアを開け、「失礼します」と入る。

「おお、やっぱり鷺宮か」

「授業中にウロチヨロしているのは私ぐらいですよ」

「そういえばそうだな。で、そいつらは？」

「クライアント
依頼人ですよ」

「そうか……。どうぞ」

「失礼します」

「で、依頼内容は？」

美穂は言いにくそうに、母に目を向けた。

「実は最近、娘が誰かに見られているような感じがすると言っているんです。

それで警察と警学校に相談したんですが、相手にしてもらえず、こちらに伺ったんです」

「なるほど……。それはいつから？」

「1か月前からです」

「そうですね。それではその依頼、受けよう。この紙に依頼内容と報酬を……」

「あの…できれば希望したい奴が居るんですが……」

「ん？誰だ？」

「涛瀬 諒という奴なんだが・・・」

「諒を？」

「知っているんですか!？」

「そりゃそうだ。涛瀬は鷺宮の戦徒アミコだからな」

「「戦徒アミコ？」」

美穂と母親は首をかしげる。

「まあ、簡単に言うと先輩が後輩を指導することを言っの

「なるほど」

「おい鷺宮、涛瀬を連れてこい」

「わかりました」

茜は諒を呼び向かった。

そしてモノの5分で連れて来た。

「篠野さん！それにお母さんまで・・・」

「おい涛瀬、彼女の依頼クエストはお前が受ける」

「別に構いませんが…、内容は・・・」

「実は・・・」

そしてかくかくしかじかで説明した。

「なるほど・・・」

「というわけで湊瀬、お前は桜浪女学院に潜入し、犯人を見つけ出せ」

「わかりました・・・って！！今女学院と言いましたよね！？ということは僕じゃ無理じゃないですか！！」

「安心なさい諒、この為に転装生チエンジの特訓したんじゃない」

「そ、そうですね・・・。茜さんが潜入すれば・・・」

「残念だけど、篠野さんはあなた限定で依頼してきたのよ」

「で、でも・・・」

「そうですね！諒君を女子高に潜入させようなんて・・・」

「なら、一度見てもらおうか。鷺宮、湊瀬連れてCVRに行つて来い」

「分かりました」

「ちょ、ちよつと！僕の意見はア

！！」

と諒は叫びながら茜に連れて行かれた……

約30分後……

「おまたせ」

茜は美少女を連れて戻ってきた。

「あの…湊瀬は……」

「わ、わた……わた……しです……」

少女はもじもじしながら目を反らしている。

「「またまた」」

篠野親子は冗談だと思つ。

茜は少女のかつらを剥いだ。

それは正しく、諒本人であった。

「「えエ　　！！」」

そしてかつらを付けた。

「凄いだろ？最初鷺宮が連れて来た時はマスタース教務科全員が騙されたくらいだ。

分からないのも無理はない。それに、CVRお墨付きだ」

「あの…これであっても…流石に…」

「仕方ないわね…」

あ、母さんが認めた。

美穂は思う。

「本気なんですね……。まあ、篠野さんがどうしてもって言うんなら…」

「ほ、ほんとか!?なら頼む!」

「は、はい……」

こうして、諒は女装^{チエンジ}して桜浪女学院に潜入することとなった……

潜入と怒りと人形

桜浪女学院 1年B組教室……

「皆さん、今日は編入生を紹介します」

女教師は黒板に＜鷺宮 諒＞と書いた。

流石に、涛瀬は中学校時代の女子が数名居るため無理であった。

「それでは自己紹介をお願いします」

「はい。鷺宮 諒といいます。まだ右も左もわかりませんが、よろしくお願いします」

諒はCVRの半分が惚れた笑顔を振りまく。

か、帰りたい……

「そ、それじゃあ、鷺宮さんの席は……」

「あの…先生。私、篠野さんの近くがいいです」

前に茜さんから聞いたことがある。

・ 神崎先輩が遠山先輩の近くに座った時は積極的に発言したらしい……

「え！ええつと…渡里さんの後ろが空いてるからそこに座ってください」

さい。

そこなら篠野さんの隣ですから・・・」

「ありがとうございます」

次に見せた笑顔はCVRが全滅した笑顔であった。

そんなこんなで、授業が始まった。

周りの視線も痛かったが、それより、篠野を見ている視線はこれと違ってなかった。

そして、クラスメイトの視線をすべて覚えた。

一時限目が終わり、諒と篠野は人気のない場所に居た。

「篠野さん、視線は感じましたか？」

「いいや…。しなかった…」

「なら…クラスメイトの中には居ないのね・・・」

「な、なあ湊瀬」

「篠野さん!」

「す、すまん！」

諒は周りに人が居ないか確認する。

だが、誰もいなかった。

「さ、鷺宮さん、今、視線を感じる……」

諒は周りを見渡す。

すると、怪しい人影が逃げて行った。

諒は追いかけてしようとしたが、篠野は諒の袖を掴んで脅えている。

まるで109（マルキュー）で脅えていたように……

「諒……」

「大丈夫よ、美穂。私はどこにも行かないわ……」

「ありがとう……」

諒もこの感じは109（マルキュー）でも感じていた。

それに、6年前も……

諒と篠野は教室に戻った。

それから二時限、昼休み、五時限、六時限で途中途中で視線を確認した。

たった五時間の間に4回、視線を感じたらしい。

諒も同じ視線を感じていた。

あの感じ、六年前に感じたことがあったな。

そう、放火された篠野さんの家に飛び込んだ時。

感じた。

殺気にも似た、嫌な視線。

この視線がもし、篠野さんのお父さんを殺した犯人なら、次は美穂が殺される。

諒はそう確信した。

そして、携帯で茜と綴にメールを送った。

数分後、了解ラジャと返信が来た。

そして、部活で諒と篠野は弓道場に居た。

諒はベンチで見ている。

「諒、お前も久しぶりにやったらどうだ？」

「そうですね。では、少しだけ・・・」

諒は弓と矢を受け取り、構える。

そして、放った。

矢は迷うこともせず、一直線に的の中心を射た。

周りからは驚きの声が聞こえる。

それもそのはず、諒は中学時代に全国大会で優勝している。

「さすがだな・・・」

「久しぶりにやりましたよ。ありがとうございます」

諒は弓を返した。

そして学校生活一日目が終わった。

河川敷を諒、美穂、紗江、琴乃と歩いていた。

「しっかしすごいね、諒ちゃんって」

「昔やってましたから……」

君の目の前でね……

「へえ、でも、なんで美穂と仲がいいんだ？」

「そ、それは隣の部屋だからな！と、当然だ！」

「そうなの？」

「ええ。私は姉が二人いるんですが、私は一人で暮らそうと思いまして……」

姉は一応、茜さんと綴先生のことだけど……

「そうなんだ」

すると、目の前にコートを着た男が現れた。

篠野は脅え、諒の後ろに隠れる。

ああ、この感じだ……

こいつがああ視線を振り撒いていた張本人……いや……殺人形。

キルドール

「コロ・・・ス・・・ターゲット・・・クロス・・・」

おいおい殺人形キルドールよ、そんな言葉を今発するのはご法度だよ…。

今の僕は、人であつても殺すくらい怒っているんだからね!!

「おい、渡里。美穂連れて隠れてろ・・・」

「えっ!?!」

「返事は!?!」

「は、はい!!」

「御坂も隠れてろ・・・」

「おい! 鷲宮!」

「俺は鷲宮じゃない… 涛瀬 諒だ!!」

諒は鞆に入れたUZIを取り出した。

「諒!!」

「諒!! ダメだ! あいつに勝つなんて無理だ!!」

篠野は諒にしがみつく。

「美穂、今は俺を信じろ・・・」

諒は走りだしながらUZIを乱射した。

しかし、やはり人形ドールだけであって効かない。

殺人形キルドールはM60を出してきた。

諒は背中に隠していたくかさげつ襲月>を取り出し、M60を切り落とした。

次に殺人形キルドールはUZIを出してきたため、胴体を真つ二つに切り裂いた。

殺人形キルドールはオイルらしきものを勢いよく吹き出しながら倒れた。

「もう、動くんじゃないぞ」

諒は襲月と突き刺した後、抜き、鞘に直した。

そして、携帯が鳴った。

『諒、そっちは済んだ？』

相手は茜であった。

「ええ。終わりました・・・」

『そう。後、元締めも強襲料アサルトが制圧したから、もう二度と現れることはないと思うわ』

「そうですか・・・」

『あと、その殺人形キルドールは装備科アムトの文が回収してくれるわ。あ、ちょっと美穂ちゃんに代わってくれる？』

「分かりました」

諒は篠野達の隠れていたところに向かい、篠野に携帯を渡す。

篠野は携帯を受け取り、まるで安心したような声になった。

恐らく、お母さんだろう・・・

でも・・・大事に至らなくてよかった・・・

「あのさ、涛瀬諒なんだよね？ほんとうに・・・」

「ええ、そうですよ」

諒は油まみれのかつらを外した。

「な、なんで桜浪つゆな女学院に来たの？」

そして、いろいろと説明した。

そして納得してもらった。

その後、篠野のマンションに向かった。

そして、篠野の部屋に上がった。

そこにはすでに、綴と茜、文が居た。

「おかえり。どうやら、諒の機転が効いてくれたおかげで被害はなかったわ」

「そうですね」

「あの・・・諒君・・・、ありがとうございます・・・」

篠野の母が礼を言う。

「いいんですよ。二人が無事なら・・・」

「それと・・・ごめんね。武偵を勘違いしてたわ・・・。許してちょうだい・・・」

篠野の母は頭を下げる。

「頭をあげてください。私たち、武偵はそんなことで恨んだりしません。

ですよ、茜さん」

「そうですね。武偵は自分の命より、クライアント依頼人を護るのが普通ですよ。だから、逆に謝れると、こちらが困ります」

「ですが・・・」

「僕は素直に篠野さんを護りたいと思ったから依頼クエストを受けたんです。だから、大丈夫ですよ」

「ありがとうございます・・・」

「涛瀬、今日は鷺宮と一日護衛しろ。私は残存が居ないか確認する。いいな」

「了解しました」

「そんじゃ平賀、帰るぞ」

「ハイなのだ！」

こうして、綴と文は帰って行った。

「さて、諒は美穂ちゃんの護衛をお願いね。私はお母さんの方を護衛するから」

「わかりました」

そして夜中、諒と篠野は二人同じベッドで寝ていた。

「なあ、涛瀬・・・」

「なに？」

「明日はもう登校しないんだろ？」

「ええ。一応、今週一杯は登下校の際に送り迎えはするつもりですよ」

「そ、そうか！ならいいんだ」

「でも……僕はあなたは救えてもお父さんは救えなかった……ごめん……」

「ううん……。もう、いいんだ。涛瀬は私と母さんを救ってくれた。ありがとう……」

諒は無言になった。

「涛瀬？」

美穂が起き上がり、諒の顔を見る。

諒はすでに寝ていた。

「やっぱり疲れてたんだ……。お休み、諒……」

そして、二人は眠りに就いた……

謝罪

翌日……

諒は武偵高制服で篠野の護衛をするため、共に桜浪女学院へ向かった。

二人は荒川の河川敷を歩いて、女学院に向かっていた。

「おい、その二人。ちょっと待て」

と後ろから声がしたため、諒と美穂は振り向いた。

そこには黒のスーツにロングコートを羽織って、長いアタッシュケースを持った男が居た。

それに……手には銃專グローブをしていた。

諒は美穂を庇うように立つ。

「誰ですか？あなたは……」

「俺は？クリサンシムム所属の殺し屋だ」

男はさらりとヤバいことを口にした。

だが、諒はそれを突っ込む余裕がなかった……。

殺し屋……？クリサンシムムは世界各国で活動する殺し専門の組織である。

この組織は目標相手にしか顔を見せないの**ターゲット**ので有名。

つまり、殺された人間しか顔を知らない集団……

「クリサンシム……。つまり……僕達を殺すつもりですか……?」

「ああ。クライアント依頼人はそう言っていたな……」

マズイ……、なんだかわからないけど怖い……。

ここは逃げた方がいいかもしれない……

諒はそう思い、一歩後ずさる。

「逃げるのか?」

「ええ……。闘って勝てる自信がないもので……」

「ハア……。まあ待て。俺は正直めんどくさい」

は?

なんだかやる気のない言い方だな……

諒は拍子抜けした。

「ならなんで僕達の前に現れたんですか!??」

「まあ、自己紹介はしておこう。俺は豊臣とよとみ紅くれないだ。そこの譲ちゃん

なら名前

ぐらい聞いたことはあるだろ？」

「えっ!？」

「く・・・紅さん・・・」

美穂は驚いたような顔をする。

「あの人の事知ってるんですか!？」

「ああ…。私が涛瀬と出会う前、一度パートナーとして父が連れて来てくれたんだ・・・」

「じゃああの人は・・・」

「元武偵だ・・・」

「そうだ。俺は昔、篠野さんと組んでいた。だが、俺は人を殺してしまった。そして、武偵局を追放された・・・」

「まさかその恨みで篠野さんのお父さんを・・・」

「んなことしねえよ…。俺はただ謝りたくて家を訪れた。だが、家はすでに火の海……。殺し屋と思われる奴が出て来たからそいつを追った……。だが・・・逃げられた……。そのことを謝りたくてな…。あの時は済まなかった・・・」

紅は頭を下げた。

「わざわざありがとうございます……。ですが、もう恨んではいません……。だから頭をあげてください」

「すまない……」

「で、紅さんはこれからどうするんですか？」

「俺は今まで通りに生きる。なにかあったらその時はまた現れるよ……」

そう紅は言っつて、立ち去った……。

その後、諒は一週間、護衛をしたが、何事もなく任務は完了した。

それから一週間……

諒は普段通りの生活に戻った……

謝罪（後書き）

とよみ くれな
豊臣 紅

豊臣 薫の兄である。

元武偵で、篠野の父と一時期ペアを組んでいたが、紅のミスで人を殺してしまった。

その後武偵局から追放され、今は殺し屋組織<?>クリサンシマム<?>に所属している。結構めんどくさがりでドタキャンすることもある。

真剣白刃取り（エッジ・キャッチング）

とある日の事……

アドシア・ドと呼ばれる武偵オリンピックがあることを知った。

正直、一年には縁のない話……

諒は溜息をつきながら学食のランチを食べていた。

この前の事があり、なんだか気まずい雰囲気教室でなっていたからである……。

「あ、いたいた。お〜い諒くん」

「あ、間宮さん。どうしたんです?」

「どうしたって、屋上にこないから捜しに来たんだよ」

「そうですか。でも、僕はもう済ませましたので……」

「なら今から屋上に行こう」

「わ、わかりました……」

「なんだか……気まずいな〜」

そして諒とあかりは屋上に向かった。

「あのことば……間宮さん。あのことは……」

「誰にも言っていないよ」

「そうですね」

諒はホッと胸をなでおろした。

そして屋上に行くといつものメンバーがいた。

「おお、諒！どこ行ってたんだ？」

「ちょっと用事がありました……」

学食食べていましたといったら殺されそう……

「ふうん」

「そういえば諒さん、この前の休み、どこ行ってたんですか？隣のクラスの生徒が噂してたんですが……」

それを聞かれたら危うい……

「ええつとですね……。ちょっと墓参りに実家に帰ってました」

まあ嘘ではない。

「でも109で見たと言ってたんですが……」

まさか・・・間宮姉妹と居たところを聞いたんじゃない・・・

「ど、どうしてですか？」

「だから聞いたんですよ・・・」

ヤバイ・・・ヤンデレモード突入だ・・・！！

「ええつと正直に話しますと・・・」

以下説明中・・・

「そうだったんですか、ならよかった」

「ええ僕もよかったです」

死なずに済んで・・・

すると諒の携帯に2件メールが来る。

一件は茜からのメールで、もう一件はNO dataであった。

誰だろう・・・

内容 今すぐ五分以内に校舎裏に来なさい！！遅れたら風穴！！

か、神崎先輩だ

!!

でもなんで僕のメアドを!?

ま、まさか……

「あ、あの間宮さん…、もしかして神崎先輩に僕のメアド教えました?」

「あ、もしかしてメール来た?」

やっぱりお前か

!!

「なんで教えたんですか!?!」

「え?だって諒君、アリア先輩が教えてほしいって言ってたから…。それに先輩と仲いいから……」

ふざけるな

!!つて突っ込

んでいる場合ではない!

「と、とにかく呼ばれたんで行ってきます!!」

諒はそのまま屋上からワイヤーを使っており、走って向かった。

約4分後……

ゼエハアと諒は息切れをしつつ、到着した。

「か、神崎先輩も短気だな・・・」

「だ・れ・が短気ですって？」

諒はその声を聞き、脅えながら後ろを振り向いた。

そこには、キンジを引きずりながら近づいて来るチア姿の神崎・H・アリアが居た。

「い、いや・・・その・・・な、なんでもありませんよ!!」

遠山先輩・・・安らかに眠ってください・・・

「まあいいわ。こらッ！キンジ起きなさい!!」

「ん・・・」

あ、遠山先輩生きてたんだ・・・

「おお、涛瀬。つてまさかアリア！」

「ええ、彼にも特訓に参加してもらっわ」

「特訓？」

「エッジ・キャッチング
真剣白刃取りよ」

あ、なんか普通っばい・・・

「いいですよ」

「そう。やっぱりアンタは理解力があるわね！バカキンジとは大違いね」

「お、おい！やめといた方がいい！」

「どうしてですか？キャッチすればいいんですよね？」

「そうよ。じゃあいくわよ」

そういうと、小太刀を取り出し振り上げる。

そして諒の肩目掛けて振りおろした。

諒は人差し指と中指の二本で挟み止める。

「えっ！？」

アリアが一番驚いた。

「あ……ありえん……」

キンジは現実逃避をする。

「こんなことなら茜さんと日常茶飯事のように特訓してますよ」

「「ありえない」」

アリアとキンジは二人で現実逃避をした。

諒はふと、ブラックオーラを感じ、振り向いた。

しかし、誰もいない……

「まさか……ね……」

「ん？ 涛瀬、どうした？」

「いえいえ。あの、神崎先輩、少し二人っきりで話したいんですが……」

「えっ、何よ？ 別にキンジが居てもいいじゃない」

諒はアリアの耳元に顔を近づける。

「ちょー！」

「デュランダル魔剣について、茜さんからメールが来ました。校内に侵入しているみたいですよ……」

アリアはカメラリアの瞳を見開いた。

「ですから、僕と茜さんは校内を調べます。神崎先輩は星伽先輩の護衛をお願いします」

「分かったわ」

そして、諒はアリアから離れた。

「それでは、神崎先輩、遠山先輩。またいつか」

「あ、ああ」

「アンタも気をつけなさいよ」

「わかってますよ。それじゃあさよなら」

諒はそのまま茜のところに向かった……

魔剣と強狼魔

諒はアリア達と別れて後、茜が陣取っている情報科インフォルマのPCルームに向かった。

そのドアには「関係者以外は教務科マスターズであっても入室を禁ずる」と書かれた張り紙が貼られていた。

諒はドアをノックした。

「諒です」

と一言言っておく。

「入りなさい」

と返事が返ってきたため入る。

茜はPCを4台を同時に操作していた。

諒は戸を閉めて、PCに近づく。

「なんですか・・・これ・・・」

PCはすべて監視カメラの映像であった。

だが、武偵高にはそれらしきものは見当たらない。

「これは私が極秘で付けた隠しカメラよ。全部埋め込み式で誰も気づいていないようだけど・・・」

「そ、そうですか」

なんかやらかしたら100%ヤバイ・・・桑原桑原・・・

「で、ちゃんとアリアに伝えたの？」

「はい。メールに書かれたことはすべて伝えました」

「そう。御苦労さま」

「あの、どうして捕まえなかったんです？」

そう諒が茜に問いかけると、茜はキーを打つのを止めた。

「どうして私が魔剣デュランタルと逢ってたって分かったの？」

「普通、メールで報告しますか？もし、魔剣デュランタルを見かけたと仮定して、すぐに電話で連絡

しますよね。そして、監視カメラで見かけたのならどこで見かけたか教えますよね。でも、茜さんはそんなことはしなかった…。つまり、魔剣デュランタルと話をして、何らかの事情で捕まえなかった…。というところですかね？」

茜は、諒の方に座ったまま向ける。

「正解よ。確かに魔剣デュランタルと逢ったわ。実際に逢って話した結果、武偵こうちに引き

込んで見るのも悪くはないかなってね」

デュランダル
「魔剣を武偵高に入れるんですか!？」

「ええ。まあ私はジャンヌを邪魔したりはしないし、それに、キンジとアリア、白雪なら負けられないでしょう。絶対にね」

訳が分からない……。

デュランダル
「なんで魔剣を武偵高に引き入れたがるんだ……」

それに……ジャンヌって……

まさか、茜さんはすべて調べたのか？

デュランダル
「でも魔剣の話って今日の朝聞いたはず……」

インフォルマ
「さすが情報科トップの情報屋だ……」

「それで、一つ聞きたいんだけど……いいかしら?」

「は、はい。なんですか?」

「あなた、美穂ちゃんと結婚するの?」

「なananんですか!?!いきなり!?!」

「だから聞いていいか聞いたじゃない」

「そ、それならそうと行ってくださいよ!..!」

「はいはい。で、どうするの?」

「篠野さんとお母さんの方は同意してくれました。ですが、武偵を辞めるか辞めないかで迷ってるんですよ..」。姉さんを探したいですし..」

「そう..。なら早く捜さないといけないわね..。って言っても何一つ見つからないのよね..」。

「そうなんですか..」。

それから、諒はP C ルームから退室した。

強襲科^{アサルト}練習場は今、アドシア ド代表が練習に使用しているため入室できない。

だから諒は自由履修で探偵科^{インケスタ}にお邪魔した。

それもキンジの隣で..。

「なんでお前が二年の授業を受けてんだよ...」

「だって、一年で習うことは一通り茜さんから教えてもらいましたから」

「どんだけ凄いなだよ茜...」

「ねえねえマーくん。茜とはどこまでやったの〜?」

このテンションの高い失礼な少女は、峰^{みね} 理子^{りこ}という探偵科^{インケスタ}Aラン
クの
武偵らしい。

「峰先輩、授業中ですよ」

「そうだけどオ〜」

「あと、茜さんに言いつけていいですか?」

「そ、それは勘弁してよ!!!リコ殺される!!」

なるほど・・・峰先輩は茜さんの事は意識しているわけか・・・弱
点みつけ・・・

そして、授業は無事に終わり、諒は行くところに悩んでいた。

実は数分前に茜からメールが来て、今日は教務科^{マスターズ}の先生が泊まりに
来るらしい・・・。

「ちとど...どうしようかな〜」

と諒はファミレスで眩きながら、夕食を摂っていた。

しばらくして、ふと、思いこしく。

「そつだ、遠山先輩のところに行こう」

というわけで、諒はキンジのところに向かった。

東京武偵高校第三男子寮……

「久しぶりだな」

ちなみに諒は一週間未満であったがここに居た。

段ボールに荷物を入れたまま過ごして、茜のところ引越したのである。

そんなことを考えつつ、キンジの部屋の前に到着した。

諒はピンポンとチャイムを鳴らす。

「はい」

と返事がした。

出て来たのは、黒のロングヘアの少女であった。

「あ、あの……遠山先輩の部屋ですよね？」

「そつだよ。君は……一年かな？」

「は、はい……」

「キンちゃん、一年生が来てるよ」
と呼びに行った。

すると、キンジが出て来た。

「涛瀬、どうしたんだ？」

「泊めてください」

「はあ！なんでだよ！？」

「実は今日、茜さんの部屋に帰れなくなっただんですよ。あはは」
諒は笑顔で言う。

「家はアリアも白雪が居るから無理だ」
すると、アリアが奥から出て来た。

「別にいいじゃない。諒は結構使えるみたいだし……」
神崎先輩、ありがとうございます……

「しかし……」

「キンちゃん、後輩が困ってるんだから泊めてあげようよ、ね？」

「・・・わかった」

「ありがとうございます」

こうして、諒はキンジの部屋に泊まることとなった。

諒は3人の邪魔をしないように、左上ベッドで、小説を読んでいた。

しばらく呼んでいると、三角関係の纏れとやらのシーンになった。

まさに今のキンジ達のような関係だった。

そして丁寧に読んでいくと、なんだか騒がしくなってきた。

諒は腕時計を見る。

午後9時38分を指していた。

寝よう・・・

そして諒は眠りに就いた…。

翌日も授業と見周りをして一日を終えた。

時間はすでに午後10時を回っていた。

諒はキンジに昨日の御礼をしようと、高級和菓子を持って寮に向かう。

すると、コンビニからアリアが紙袋一杯にももまんが入っていた。

「あ、神崎先輩。またももまんですか？」

「悪い？」

「いえいえ。それより、最近テュラントルは魔剣の気配が強くなっています。動くとしたら、アド

シア ド当日ですね」

「やっぱりね。で、今日もアンタは泊まるの？」

「いえ、これを遠山先輩に渡そうと思ひまして」

「アンタも律儀なのね」

「これが普通ですよ」

そんな話をしながら、キンジの部屋のドアを開けた。

アリアと諒は持っていたお菓子を落としかけた。

上半身裸のキンジが白雪の服を脱がそうとしていた……

「「「「あ……………」」」」

四人は固まる。

まず初めに動いたのは諒であった。

「遠山先輩……見損ないましたよ……」

諒は俯きながら、ベレッタP×4“ストーム”を取り出した。

「諒……アンタとは気が合うみたいね……」

次はアリアが白銀& a m p・漆黒のコルト ガバメントを取り出した。

「ちょ、ちよつと待て!!」

「「問答無用で風穴ア

!!」」

ハモる諒とアリアはキンジ目掛けて撃った。

キンジはうまく避けて逃げていく。

「バカキンジ! ちょ……ちよつと任せたらこれ!?!?こ、この強狼魔! 死ね! ケダモノ! ウジ虫! バクテリア!」

「ま、待て！話せばわかる！！」

「話ですか！？それは綴先生に話してください！」

諒は白雪に制服を掛けながら言う。

「ち、違うの Aria に諒君！あれは合意の上だったんだよ！」

「「じ、合意！？」「

「そ、そうなの。私から脱ごうとしたの！だからキンちゃんは悪くない！」

白雪は Aria を止めた。

「ぬ、脱ぐって何しようとしてたんですか！？」

「た、例え合意の上だとしてもオ　　っ！！！」

Aria は白雪を背負い投げた。

「きゃん！！」

白雪、戦闘不能……

「キンジ！そ…それはボディ　ガードの禁止事項よ！仲良しぐらいなら大目に見るけど！く…依
クライアント
頼人とそ…そ…そういう関係になるなんて！武偵失格！失格！大失格う　　！！！」

そして再び諒もリロードして参加。

「風穴祭り!!!」

諒とアリアは乱射した。

キンジはワイヤーを使って、ぶら下がっていた。

「間一髪だったな・・・」

「遠山先輩、海で頭冷やしてこい」

と諒は笑顔で、バタフライナイフを取り出し、ワイヤーを切断した。

キンジはどんどんしたに落ちていく。

「浮輪はあげない!!」

とアリアが叫んだ。

アリアと諒はキンジが海に落ちるのを確認した後、握手を交わした。

翌日、キンジは風邪をひいて休んだらしい・・・

そのまま見ると諒は思っていた。

殺人形（キルドール）の使い魔

諒は少しだけ、キンジの事が気になったため、第三男子寮に向かった。

「まあ、あんなことしてたけど、本当は優しいんだよな……遠山先輩は……」

諒はそう言いながら、空を眺める。

空には飛行機雲がクロスしていた。

「あ、なんだか不吉な予感がする……」

諒はそう呟くと本当に不吉なことが起きた。

視線を前に戻すと、数人のチンピラが二人の少女を取り囲んでいた。

「ねえねえ、今から一緒にお茶しない？」

とチンピラが云っている。

確かあの子たちは、探偵科インケスタの一年……。

クエスト
任務中かな……

まあ、助けてやるか・・・

と諒は思いつつ、チンピラ達に話しかける。

「なんだてめえ？」

「あの、散っていただけですか？」

散る＝失せる

というのが茜の言い方だ。

「はあ？意味わかんねえよ。とつとと失せるガキ」

「だから：あなたが失せてくださいよ。雑魚は雑魚なりに脅えながら家に籠っててください」

「んだと！」

「てめえ今なんつった!？」

「だ・か・ら、失せるっつてんだよ」

諒は笑顔で言った。

「このガキ!!」

一人のチンピラがナイフを取り出し、諒に襲いかかった。

諒は懐からスタンガンを取り出し、チンピラの首元に当てた。

チンピラは電気ショックで気を失い倒れた。

「ひい

!」

と残りのチンピラは脅えた。

「まだやりますか?」

バチバチつとスタンガンを鳴らしながら笑顔で問いかけた。

「す、すいませんでした

!」

とチンピラが倒れた奴を引きずりながら逃げて行った。

「雑魚雑魚さいなら...」

と諒は呟きながら、スタンガンを懐に直した。

「あ、あの...ありがとうございます!」

「おかげで助かりました」

「別にいいですよ。武憲1条を護っただけですから。

それより、クエスト任務中ですか？」

「はい」

「そうですか。では今度から気を付けてくださいね」

と諒が立ち去ろうとしたが、二人は服の袖を掴んだ。

「あの…なんですか？」

「すみません…、道を教えてください…」

「はい？」

その後、近くのファミレスに場所を移した。

「なるほど…、道に迷った拳句、財布を忘れて空腹になり、
ふら付いていたところにあの雑魚チンピラが来たというわけですか…」

「はい」

パフェの Spoon をくわえながら返事をする二人…。

「あの、この借りはきちんと返します！」

「私も！」

「別にいいですって…。それより、クエスト任務はなんですか？」

「ええっと…これです」

少女は任務書を諒に渡した。

謎のロボットの目撃情報の調査

ランクA 報酬¥100,000 内容「近頃、荒川で謎のロボットが現れるという。
念のため、調査を依頼する」と書かれていた。

「謎のロボット……」

恐らく、殺人形キルドールのことだろう……。

だが残存が居るとは聞いていなかったし、今まで何もなかった……。

となると可能性としては殺人形キルドールであり、別目的で稼働しているとしたか考えられない……。

「あの……どうかしましたか？」

「いいえ。ちょっとだけ気になっただけです……」

下手したらこの子たちも殺されるかもしれない……。

止めておこう……。

「あの、言いにくいんですが、この任務、やめた方がいいですよ。私も一度護衛任務で似たようなロボットに殺されかけましたから……。

「」

二人は驚く。

これできつと諦めてくれるはず……

「でもあなたが居るといふことは倒してんですよね!？」

し、しまったー！ー！ー！

別の意味にとらえるともうなってしまうんだった

！！

「す、すごい……。何年生ですか!？」

「い、一年ですけど……」

「「えエ

！！」」

と少女二人は驚く。

あの……。出会ってから驚きすぎじゃないか……

すると、アイスコーヒーを店員が持ってきた。

「お・ま・た・せ・し・ま・し・た!」

その店員は怒りをこらえているような言い方で、諒の知っている少女の声に似ていたため、諒は恐る恐る振り向く。

そこには、ウエイタの恰好をした篠野が居た。

「さ、篠野さん!!」

「涛瀬・・・その子たちは誰だ？」

篠野はブラックオーラを放ちながら、持っていたトレを縦に持った。

「ちよつとこつちに！」

諒は席を立ち、篠野の腕を引いて、人目のつかないところに連れていく。

「い、いきなり何をする!？」

「すみません。でも、勘違いしないでください。あの二人はただの同級生で・・・」

カクカクシカジカと説明した。

「なんだ…そうだったのか…安心した」

篠野はホツとしたように胸をなでおろす。

「そうです。で、彼女達が持っていた任務書クエストペーパーで気になった単語がありましたね・・・」

「なんだ？」

「謎のロボット……」

「まさか……」

「恐らく殺人形……」

と諒が話していた途中で、何かが爆発したような音が轟いた。

それと同時に悲鳴が響き渡った。

諒と篠野は急いで戻る。

すると、さっきまで諒が座っていたところの壁がなくなっていて、

そこに……居た……

殺人形が……

それに、肩に小学生くらいのゴスロリ姿の少女が座っていた。

そして、その殺人形キルドールに取り付けられた日立工機九二式重機関銃は、さっきの少女二人に銃口を向けている。

諒はとっさにベレッタpx4“ストーム”で銃口を反らした。

「その子たちから離れなさい!!」

「あ!! やつと見つけた! お兄ちゃん」

は？お兄ちゃん・・・？ありえない・・・

だって・・・産まれる前に両親と事故で死んだからだ・・・

「早くその場から離れる！！」

「い〜やくだ〜。だって、お兄ちゃんがこっちに来てくれないんだもん・・・」

「さっきから何を言ってるんですか！？僕には妹はいない！！」

「たうせ 涛瀬 あき 昶・・・。永遠の永に日の出の日・・・。

永遠に日が沈むことのないくらいに元気に過ごしてほしい。
お兄ちゃんがつけてくれた名前だよね？」

そんなはずはない・・・。

産まれてもいない、戸籍もないはずなのに・・・

なんで存在している？

確かに僕は永遠に日が沈むことのないくらいに元気に過ごしてほしい・・・。

そう思つて昶と名付けるつもりだった……

だが死んだ……

産まれる前に……

「そんなはずはない!!」

「お兄ちゃん、まだ信じてないんだ……」

少女は落ち込んでいるようにも見える。

「とにかくその子たちから離れなさい!!」

「嫌だよ!!」

少女 昶は殺人形キルドールの銃口を再び少女達に向けた。

昶はストームで昶の腹部を撃った。

昶は殺人形キルドールから落ちた。

そして殺人形キルドールの首元を撃ちぬいた。

殺人形キルドールはオイルを吹き出しながら倒れた。

「お……兄ちゃん……」

諒は昶に近づき、片膝をつき、傷口を持っていたハンカチで塞ぐ。

「言っておきますけど、貴女は僕の妹なんかじゃありませんよ……」

「

「ち、違うよ……。私はね、本当にお兄ちゃんの妹なんだよ……」

諒はその言葉を聞いて後、探偵科^{インケスタ}一年二人を診る。

少しすり傷はあるが、命に別条はなさそうだと判断し、昶のそばに付き添い、手を握ってあげる。

昶は安心したように、眠りに就いた。

「涛瀬、この子は……」

「分かりません。でも、ほっとくわけにもいきませんから……」

「そうか……」

その後、昶、一年二人を救急車に乗せて武偵病院に向かった。

もちろん、諒は昶の方に乗った。

篠野も心配だからといって、一年の救急車に乗った。

殺人形（キルドール）の使い魔（後書き）

涛瀬 昶 としせ
あきら

自称諒の妹。

殺人形キルドールの使い魔・・・

・・・以下は以後説明する・・・

真実への一歩

武偵病院に到着し、昶はすぐさま手術室に運ばれた。

インクスタ
探偵科一年の二人はその後目を覚まし、念のため検査を受けたが、何も以上はなかった。

そして、警学生の事情聴取を受け、帰った。

諒は手術室の前の椅子に座り、俯いて待っていた。

美穂は自販機から飲み物を二つ持って、諒のところに戻った。

「涛瀬、大丈夫か？」

「ええ…」

「そうは見えないぞ」

美穂は諒に缶コーヒーを渡し、隣に座った。

「なあ諒、これからあの子をどうするんだ？」

「正直…僕はどうしたらいいか迷ってるんです…。あの子を施設に預けるか、

警察に本当の家族を探してもらうか…」

「それで涛瀬は納得するのか？」

「…できるわけじゃないですか。あの子はなんだか、他人に思えない……」

「ならどうする？」

「一応、茜さんに頼んで鑑識科にDNA鑑定を依頼できないか確認してもらってます」

「そうか……」

そして、一時間後……

手術は無事に終わった。

病室に移り、諒は昶の手を握ってあげる。

すると、茜が鑑識科Aランクの天岸湊あまぎし みなとを連れてきた。

その後ろから救護科Aランクの暦と装備科Aランクの文も入ってくる。

「すみません、茜さん。皆さんにも迷惑をかけてすみません……」

「別に気にしないで。湊は単位不足で調度良かったし、暦は暇だったらしいし、」

文もあの殺人形キルドールについて話があるみたいだし……」

「それでは、少し検体させていただきます」

湊はそう言い、持ってきたDNA鑑定キット（約¥3,000,000相当）を容れた鞆から道具を取り出し、諒と昶から検体を採取し、鑑定を始めた。

流石Aランクであって早い・・・

見る見るうちにパーセンテージに直している。

それも、3種類の方法すべてにおいて・・・

恐らく、病院内でこんなに緊迫して沈黙はここだけだろう・・・

「できましたよ・・・茜さん」

湊は記入していた紙を茜に渡す。

「そう」

茜はその紙を受け取り見て、一息ついて、諒に渡した。

美穂も横から覗く。

その結果は・・・

100%・・・

つまり、諒と昶は血の？がった兄妹兄妹であるということを実証していた。

「ありえない……」

諒は驚きながら呟いた。

「だけど、湊は今まで何百件ものDNA鑑定で100%の正確さよ。間違える事はない…。もし遊び半分で間違えるようなら……」

茜はそういうと、キングコブラを指さした。

それはくドタマを打ち抜く>という意味がある。

「茜さん、そんなふざけたことはしませんよ。事実、結果が出ただけです」

「でも、どうして？諒君の妹さんは生まれる前に他界したのよ。それなのに居るなんて……」

「それに、一つだけ引つかかるのよね。諒、両親が亡くなった時に、妹さんはまだお母さんのお腹に居たんじゃ？」

「はい……」

「諒の両親が死んだのは去年……。歳が合わないわ……」

「確かにそうですね。もし産まれていたとしたら、一歳のはず……」。

でも彼女は小学4年ぐらい・・・」

すると、諒はあることを思い出す。

「…あの、姉さんから聞いたんですが、十年前にも妹が産まれるはずだったんです。

でも、死産で顔を見ることもなかったんです…。もし、その時産まれたのがこの子だとしたら・・・」

「それは諒を家族全員が騙していたという事にもなるわよ？」

「この際、その選で調べてみないと辻褄が合いませんから・・・」

「そうね…。なら、私とその関係者を捜すわ」

「お願いします」

「さてと、次は文よ」

「ハイなのだ！さっき回収した殺人形キルドールを調べたのだが…、この前回収した奴に似てたのだ。でも、少し違ったのだ」

「というとエアとオイルのハイブリッド駆動だったの？」

「その通りなのだ！それに・・・」

文は鞆からコンピュータ・コントローラ・プログラムの基盤を取り出した。

「ここに<カメラア>と書いてあるのだ」

茜は驚いた様子で、基盤に目を向ける。

「これ……」

「どうかしたの？茜」

「この基盤……ダイレクト・パーソナル・コンピュータのコードって<アウトウ>じゃなかった？」

「なんでわかったのだ!？」

「やっぱりあいつが造ったのか……。どおりであんなに銃装備にしてる割に射撃判断が遅いわけだわ……」

「茜、まさかこの殺人形キルドールを作った人を知っているのか!？」

「ええ、はっきり顔まで覚えているわ。ツバキ・クジヨウ……。世界武器製造販売改造専門?<カメラリア>の社長よ」

茜の言ったことに、文、暦が反応した。

「そんな人がなんで殺人目的のロボ開発しているのよ!？」

「戦争のために作るって言ってたけど、今は戦争に使うことはない……。それから何も分からずじまいね。最近どっかと提携を組んだって言ってたけど……。まさかこんなことになるなんて……。まあ、ツバキには私から言うておくわ」

「でも、なんで射撃速度に微妙に遅いプログラムになっているのだ

「？」

「それはツバキが人を殺す意思がないからね…。だからわざと遅らせて逃げる隙を与えるのよ」

「なら造らなければいいのに・・・」

その時、美穂の言った言葉が皆の同感を得たのであった・・・

真実への一歩（後書き）

あまぎし みなと
天岸 湊（16）

レベア
鑑識科Aランク

鑑識のDNA鑑定はSランク並みなのだが、DNA鑑定以外は普通のAランク。

そのため、DNA鑑定の時しか動くことがなく、単位が不足気味である。

それを毎回茜がカバーしてくれている。

ちなみに美少年である。

ツバキ・クジヨウ（？）

キルドール
世界武器製造販売改造専門？<カメラリア>の社長。

殺人形の生みの親。

人は殺さないがモットーである。

ちなみに武偵Aランクである。

隠し事は必ずばれる

その後、茜は昶について調べると言い、病室を出て行き、湊と文は用事が出来たと帰っていった。

暦は腕時計を見る。

時刻は夕方6時58分を指していた。

暦 「そろそろ暗くなるわね…。篠野さん・・・だったかしら？」

美穂 「は、はい」

暦 「家まで送ってあげる」

美穂 「でも…」

諒 「暦先輩、お願いします。篠野さんももう帰った方がいい。でないとお母さんが心配しますよ」

美穂 「だが・・・」

暦 「篠野さん、行きましょう」

暦の目は、く二人つきりにさせてあげましょうと語っていた。

美穂 「わかりました・・・」

そして暦と美穂は帰って行った。

暦は自家用の日産 フェアレディ Z Z34に美穂を案内し、車に乗せた。

そして、Zは走りだした。

Z車内……

美穂「あの……坂上さんはなんで武偵になったんですか？」

暦「正確には救護武偵（ドクターDA）……医者だけど……。まあ武偵にはかわりないけど……。そうね……強いて言えば、茜の援護がしたかった……というところね。突撃特攻部隊の強襲科アサルトだった茜はとても危なっかしくて、衛生科メディカだった私には見てられなかったの。そしてあの

日……茜の命令を無視した親友が撃たれた……。それからかしら、茜が脅しを掛けるようになったのは……」

美穂「脅し……ですか？」

暦「ほら、さっきも湊って男の子にも銃を指差してくドタマを打ち抜く……って合図出していたし……」

美穂「そういう意味だったんですね……」

暦「ええ。まあ茜のおかげで最近死者0人、怪我人は減ってきて

ているからありがたいんだけど…、
まだ引きずってるのよね……」

暦はまるで悩みを抱えているように溜息を吐いた。

美穂「何をですか？」

暦「諒君のお姉さんを見殺しにしてしまったこと親友を護り切れ
なかったことを未だに後悔してる。
だから諒を面倒みているのよ」

美穂「だから涛瀬はあの人と一緒に居るんですね……」

暦「そういうことよ。だから、安心して」

美穂「あ、安心して何がですか!？」

暦「諒君の婚約者なんですよ？」

美穂「なananで知ってるんですか!？」

暦「茜から事情は聞いたわ。でも安心して、みんなには黙ってお
いてあげる」

美穂「そうですか……」

美穂はホツとしたように胸をなでおろした……

その頃、武偵病院 昶の病室……

諒 「昶……」

諒はそう呟き、手を握る。

病室に備え付けられた時計は夜の7時48分を指している。

心電図の音だけが響いている。

微かに昶の寝音が聞こえる。

その寝顔は、どこか諒の姉である真紀に似ていた。

諒 「まったく……こうしてみると母さんに似てるな」

諒は髪を撫でるように触れる。

すると、スライドドアが突然開いて、まるでマトリックスの出てくる主人公が着ているようなコートを羽織った警学生が入ってきた。

諒 「あの……誰ですか？」

？ 「東警学 二年の豊臣だ」

その警学生は、生徒警察手帳を懐から取り出し、諒に見せる。

諒 「警学生が何の御用ですか？」

諒は昶を隠すように立ち上がる。

豊臣「そのガキを器物損壊並びに障害・業務妨害の罪で逮捕しないといけないんだよ…」

豊臣と名乗る警学生はめんどくさそうに溜息をついた。

諒 「で、でも死人は出ていません！それにこの子は怪我をしていない…！」

豊臣「そんなこと、こっちは関係ない。俺たちは犯人を捕まえることが出来ればそれでいい」

豊臣は殺気を放ちながら諒を睨む。

諒 「だからと言って、素直に引き渡すわけないでしょ…！」

豊臣「なら力づくで…」

そういつと、豊臣は懐に手を入れる。

諒も懐に手を入れてストームに手を伸ばす。

豊臣「ハア…。まあいいわ」

豊臣はそういつと、懐から書類のような紙を取り出した。

豊臣「安心しろ、そいつは見逃してやる」

諒「本当・・・ですか？」

豊臣「ああ。そうでもしないと茜が厄介なことを起こしかねないからな・・・」

諒「茜さんの知り合いですか？」

豊臣「一応な、でも、今は電話かメールでしか連絡はとらない。だからあいつが帰ってからきたんだよ・・・」

諒「そうだったんですか」

諒は懐のストームから手を放し、手を抜き、警戒を解いた。

豊臣「で、そのガキにこれを書いてもらいたいんだが・・・今は無理そうだ・・・。お前が代わりに書いてくれ」

豊臣は書類を広げて、諒に渡す。

諒はその書類を受け取り、目を通す。

諒「証言書・・・ですか？」

豊臣「ああ。まあ、知らないと言書いてくれればそれでいい」

いい加減だな……

そう諒は思った。

諒 「分かりました」

諒は用紙に<知らない>と一言だけ書いて、豊臣に渡した。

豊臣「あんがとよ。そんなじゃあ、このことは外部に漏らすなよ。いな？」

諒 「分かりました」

豊臣「ならいい」

豊臣はそういうと、病室を出て行った。

諒 「なんだっただらろう……」

諒は少し不思議に感じた。

昶「お……にい……ちゃん……」

諒はその声を聞いて、すぐに昶に近寄る。

諒「昶！大丈夫！？」

諒は昶の顔を見ながら問いかける。

昶「お兄ちゃん・・・初めて昶の名前・・・読んでくれたね・・・うれしい・・・」

昶の声は、酸素マスクのせいもあってか、弱々しかった。

諒「ごめんね・・・。まさか・・・本当に居たなんて信じられなくて・・・」

諒は涙を流しながら、昶に謝る。

昶「いいん・・・だよ・・・。昶もね、真紀姉ちゃんからお兄ちゃんがいることを聞いて、逢いたかったの・・・。先週もね、お姉ちゃんが来て、お兄ちゃんの事いっぱい話してくれたの」

諒はその言葉に驚いた。

諒「姉さん、先週、昶に会いに来たの！？」

昶「うん。今度はね、知らないお姉さんと来てくれたよ・・・」

諒「・・・そう。姉さん生きてたんだ・・・。よかった・・・」

諒は嬉しさのあまり、声が出なかった。

その後、アンビュランス救護科の担当教師<矢常呂 イリン>を呼び、諒は病室の外の廊下で立って待った。

諒「確実、姉さんが生きていとなると、後は見つけるだけだな…」

諒は、そう呟き、姉が生きていた事のうれしさで笑みになる。

諒は今後、昶をどうするか考えたが、今のところ、最初に考えた選択肢は無駄であることは定かであった。

そして、諒は矢常呂先生の診断結果を聞いて、明日、退院させることを決めた。

翌日、諒はいつものように授業を受けていた。

明日、アドシア ドのため結構先生がそちらの打ち合わせに回されていて、自習が多かった。

その為、ほぼ自由時間であった。

諒は自習時間になり、一応、ノートに予習をしておくことにした。
いわば、がり勉である。

ライカ「諒、お前は真面目すぎねえか…？」

ライカは雑誌片手に諒にいちゃもんを付ける。

諒「無駄に時間を浪費したくないものでね」

諒はそんなことはお構いなしにシャープペンを走らせる。

すると、ガラッとスライドのドアが開いた。

その為、席を立っていた生徒や喋っていた生徒が慌てて席に座った。

諒は誰だろうと、開いたドアに目を向ける。

そこに立っていたのは・・・

諒「矢常呂先生！！昶！！」

諒は驚きのあまり、立ち上がった。

昶「お兄ちゃん！」

と昶は諒に走り寄り、飛びついた。

勿論、周りからは驚きの叫びが聞こえる。

しかも、昶は武偵高制服を着ている。

諒 「あの…なんで…」

矢常呂「その子がどうしても君に会いに行くと聞かなくてね。連れて来たの」

諒 「なんで放課後まで待てないんだよ…？昶」

昶 「だって、放課後になったらどこにも行けなくなっちゃうよ」

諒 「そうだけど…」

諒は頭を片手で押えながら、溜息をついた。

あかり「ねえ…諒君？」

諒 「はい？」

志乃 「その子は…？」

諒 「ええつと…妹です」

諒の言葉に再び驚いたような声が響き渡る。

矢常呂「それじゃあ、またね。その制服はあげるから」

矢常呂は、逃げた……

諒 「はあ……」

昶 「ねえねえお兄ちゃん！」

諒 「なに？」

そう問いかけると、昶はクルリとターンして見せた。

昶 「似合ってる？」

諒 「うん、似合ってるよ」

諒がそう返すと、昶は嬉しそうに笑顔を見せた。

するとクラスの男女が昶と諒を取り囲んだ。

「きゃーかわいい！」「可愛い！！」「写メらせて！」「私も！」「諒にこんなかわいい妹が居たんだな！」「うらやましい！！」「ねえねえ何歳？」「などと言ってくる。

昶 「お兄ちゃん」

と昶は泣きそうな顔をしながら、抱き付いて来る。

諒 「はいはい」

諒は頭を撫でてあげる。

諒「すみません、少し人見知りか激しくて…。写メだけは勘弁してください」

女子「それなら仕方ないわね・・・」

と写メを取ろうとしていた女子は諦める。

あかり「ねえ、名前はなんていうの?」

すると、昶は恐る恐る振り向く。

昶「昶・・・」

あかり「へえ、いい名前だね」

昶「お兄ちゃんが付けてくれたの・・・」

生徒一同「へえ」

生徒一同の視線は諒に向けられた。

諒「あの・・・なんですか?」

萌咲「いや、以外に名前付けるセンスあったんだな」と思っ
てな

生徒一同も頷き賛同する。

諒「悪かったですね、センスないように見えて・・・」

すると、再びスライドドアが開いた。

再び、慌てて全員席についた。

？ 「あ、やっぱり来てたのね」

諒 「茜さん、どうかしたんですか？」

茜 「さつき、イリンさんに聞いたのよ。それより、今は自習？」

諒 「はい。そうですが・・・」

茜 「そう。なら、行きましょう」

諒 「行ってくつてどこに？」

茜 「もちろん、昨日言ってた人のところよ」

諒 「分かりました。でも・・・」

茜 「大丈夫よ、先生には伝えてあるから」

諒 「そうですか。昶、行こうか」

昶 「うん！」

こうして、茜、諒、昶はある人に逢いに行くこととなった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3730w/>

緋弾のエリア～情報科-インフォルマ-の戦弟-アミコ-～

2011年11月16日12時09分発行